



# 国際文化情報学会

2018年11月24日@外濠校舎

## 国際文化情報学会実施要項

開催日時：2018年11月24日（土曜日）

12時40分～13時20分 学会総会

13時30分～18時00分 研究発表会

18時10分～20時00分 表彰式 懇親会

### 場所

総会・本部： 外濠校舎 S407

研究発表： 外濠校舎各教室 4F ギャラリー

表彰式・懇親会： さったホール

### 学会総会議題

- 1、2017年度会計報告
- 2、2018年度の学会運営方針
- 3、次年度以降の運営方針の変更について
- 4、その他

### 懇親会&表彰式スケジュール

- 1、学部長挨拶
- 2、乾杯、懇談
- 3、学部パンフレット表紙コンペ結果発表と表彰
- 4、FIC サロン（国際文化学部生対象就職セミナー § 懇親会）のお知らせ
- 5、学生審査員および学会発表者への連絡事項
- 6、学会各部門最優秀賞、奨励賞結果発表と表彰

### 審査に当たる教員、院生、学生のみなさんへ

審査用紙の受け取りと提出は S407 の学会本部で行ってください。

質問等も本部へ問い合わせてください。

## 『異文化』編集委員からのお知らせ

最優秀賞および奨励賞受賞者の論文は、改稿の上『異文化』に掲載します。その際の字数は12000字以内とする。

受賞者はフォーマットをダウンロードし、必要事項を記入の上、国際文化学部事務まで提出すること。

パフォーマンスや映像作品に関しては、誌面に掲載可能な形態のものに限る。(2017年度から全員の発表概要の掲載をやめ、受賞者だけに絞ることにしました)

### 【フォーマット掲載ページ】

国際文化学部 Web ページ > 在学生の方へ > 2018年度国際文化情報学会の開催について

[http://www.hosei.ac.jp/kokusai/NEWS/zaigaku/180730\\_01.html](http://www.hosei.ac.jp/kokusai/NEWS/zaigaku/180730_01.html)

【提出締め切り】12月4日(火)17:00(厳守)

【提出先】国際文化学部事務(jkokusai@hosei.ac.jp)

国際文化学会の教員審査の結果通知を希望する人へ

学会発表に対する教員審査員による評価を知りたい発表者は、下記の要領で「教員審査結果通知申請フォーム」より申請をすることができます。

- 1) 申請は代表者（プログラムに書いてある方）が行ってください。
- 2) 「教員審査結果通知申請フォーム」へのアクセスには大学付与の Google アカウントへのログインが必要です。
- 3) 申込期限：11月30日（金）17：00
- 4) 結果は12月10日（月）までにメールで通知いたします。
- 5) グループで発表を行った場合には、通知を受けた発表者がメンバーに共有してください。
- 6) 「教員審査結果通知申請フォーム」の URL: <https://goo.gl/forms/PEaa6KWBbCVt7hol1>



## 研究発表会詳細

- (A) 論文発表：質疑応答を含め30分。
- (B) ポスター発表：模造紙1～6枚まで。補助の机をボード前に設置可。審査の都合上、審査員対象に行うプレゼンテーションにかかる時間は5分以内、その開始時間の指定はできない。
- (C) 映像作品：質疑応答を含め30分、ただし学部紹介ビデオ本編は10分以下。
- (D) インスタレーション、パフォーマンス：一教室を用いて70分。

## 審査

審査は学会当日の発表を見て、行う。論文の審査は学会当日の発表を見た教員二名、学生または院生審査員三名による採点（各10点満点）の合計によって、ポスター、映像作品、インスタレーション発表の審査はそれぞれ教員三名、学生または院生審査員四名の採点（各10点満点）の合計によって、最優秀賞1件、奨励賞2件を決定する。万が一、審査員に欠員が生じた場合は控えの審査員を派遣するが、事情によりそれができなかった場合はその発表者の審査に当たった教員、学生審査員全員の評点の平均点を欠員分の評点として加点する。

審査ありのA,B,C,Dの部門ごとに最優秀賞1件（現金2万円）、次点に奨励賞2件（現金1万円）を贈る。ただし、A部門の論文発表については学部学生と院生の二部門に区分し、それぞれに賞を贈り、教員および外部参加者は除外する。同点で最優秀賞が2件以上、奨励賞が3件以上出た場合、教員の採点が高い順位で決定する。それでも差がつかない場合、同点の両者に該当の賞を与える。ただし、最優秀賞が2件でた場合、奨励賞は1件とする。応募が3件以下の場合是最優秀賞1件のみとする。受賞者に対して、点数を発表する。講評に関しては、学会終了後に発表者の要望に応じて、閲覧できるようにする。発表者から評価をめぐる疑義が生じた場合、企画広報委員会のなかに、審査調査委員会を立ち上げ、審査員に評価の確認を依頼し、審査が厳密に行われたかを調査する。

## 評価基準

発表の評価基準は以下に示す通りです。これを目安に審査員の責任において最終的な評点を出してください。審査用紙には講評欄を設けるので、その評価にいたった理由を書き込んでください。

### A 部門（論文）

- |                            |                                  |
|----------------------------|----------------------------------|
| 1. テーマ設定、問題提起に興味をそそられたか？   | 7. プレゼンテーションに説得力はあったか？           |
| 2. 発想に独創性や意外性があったか？        | 8. レジュメや資料、パワーポインター、映像に不備はなかったか？ |
| 3. 論理展開はしっかりしていたか？         | 9. 質疑に対して適切な回答が得られたか？            |
| 4. 先行研究を踏まえ、引用や参照が示されていたか？ | 10. 持ち時間を有効に使い、時間内に発表を終えたか？      |
| 5. 発表の仕方に工夫がこらされていたか？      |                                  |
| 6. 冗長や不足がなく適切に表現されていたか？    |                                  |

② B 部門（ポスター）

- |                             |                            |
|-----------------------------|----------------------------|
| 1. テーマ設定、問題提起に興味をそそられたか？    | 6. 冗長や不足がなく適切に表現されていたか？    |
| 2. 発想に独創性や意外性があったか？         | 7. ポスターの表示や機材に不備はなかったか？    |
| 3. 論理展開はしっかりしていたか？          | 8. ポスターの完成度は高かったか？         |
| 4. 先行研究を踏まえ、引用や参照が明示されていたか？ | 9. 口頭説明は規定時間内（5分以内）に終わったか？ |
| 5. 発表の仕方に工夫がこらされていたか？       | 10. 質疑に対して適切な回答が得られたか？     |

③ C 部門（映像）

- |                           |                                       |
|---------------------------|---------------------------------------|
| 1. テーマ設定、問題提起に興味をそそられたか？  | 7. 出典を明示するなど、<br>映像や音楽の引用は適切に行われていたか？ |
| 2. ストーリー展開や論理展開に説得力はあったか？ | 8. 機材の操作に不備はなかったか？                    |
| 3. 印象や記憶に残るフレーズやシーンがあったか？ | 9. 質疑に対して適切な回答が得られたか？                 |
| 4. 手法に独創性や意外性があったか？       | 10. 持ち時間を有効に使い、時間内に発表を終えたか？           |
| 5. 映像編集に工夫が見られたか？         |                                       |
| 6. 音声は聞き取りやすかったか？         |                                       |

④ D 部門

- |  |                        |
|--|------------------------|
| 1. テーマ設定、問題提起に興味をそそられたか？               | 5. 印象や記憶に残る要素があったか？    |
| 2. 発想に独創性や意外性があったか？                    | 6. 作品の完成度は満足のいくものだったか？ |
| 3. 展示の仕方やパフォーマンスに<br>工夫が凝らされていたか？      | 7. 引用や参考資料は明示されていたか？   |
| 4. 展示の仕方やパフォーマンスの<br>エンターティメント性は高かったか？ | 8. 機材や装置の操作に不備はなかったか？  |
|  | 9. 口頭説明に説得力はあったか？      |
|  | 10. 質疑に対して適切な回答が得られたか？ |

評点の指標として以下を参照。

10～9	8～7	6～4	1～3
優秀賞に値する。	奨励賞に値する。	可もなく不可もない。	劣っている。

制作補助

B部門の発表については1万円、C,D部門の発表については、3万円までの制作費を実費で支給する。

制作にかかった費用のリストに宛名を代表者にした領収証を添えて、11月30日午後5時までに学部事務に提出すれば、企画広報委員が審査し、妥当と思われる金額を支給する。

## 審査員配置一覧

### 論文部門(13:30~16:55)

	審査員リーダー	学生審査員	学生審査員	学生審査員	学生審査員	教員審査員	教員審査員	補充審査員(執行部)	補充審査員(執行部)
教室A	大嶋ゼミ 園(前半審査)	岡村ゼミ 八巻(前半審査)	佐々木直美ゼミ 山口(後半審査)	佐々木直美ゼミ 高橋(後半審査)	今泉ゼミ 長澤(後半審査)	渡辺	江村	栩木ゼミ執行部 細井杏美(前半審査)	
教室B	重定ゼミ 佐巻(後半審査)	岩川ゼミ 神山(前半審査)	大西ゼミ 前田(初回以降審査)	大西ゼミ 石川(初回以降審査)		今泉	衣笠	島田ゼミ執行部 吉野(初回のみ審査)	栩木ゼミ執行部 小野寺(初回のみ審査)
教室C	稲垣ゼミ 杉浦	稲垣ゼミ 御厨	稲垣ゼミ 増田	中島ゼミ 田中		遠藤	井坂		
教室D	衣笠ゼミ 佐々木	衣笠ゼミ 宮下	衣笠ゼミ 森田	衣笠ゼミ 長田		重定	竹内		
教室E	日暮	リュウ	ユン	佐々木(一)ゼミ 本橋		佐々木一恵	廣松		

※日暮さんは自身の発表終了後(14:05-)に審査に加わる。本橋さんは13:30~14:35の間の2回の審査のみを行う。所属ゼミの審査を行わないようローテーションに配慮すること。

### ポスター部門(13:30~17:00)

	審査員リーダー	学生審査員	学生審査員	学生審査員	学生審査員	教員審査員	教員審査員	教員審査員
外濠4階 ギャラリー	栩木ゼミ 小林	栩木ゼミ 大泉	粟飯原ゼミ 高橋	粟飯原ゼミ 川島	粟飯原ゼミ 中西	大西	深谷	粟飯原

所属ゼミの審査を行わないようローテーションに配慮すること。

※13:50~14:20でインスタレーション部門のS504 佐々木直美ゼミの審査を行い、14:30~16:10で映像の審査を行う。

その後、インスタレーション部門のS504 衣笠ゼミとS401 粟飯原ゼミの審査を行う。

### 映像部門(14:30~16:10)

	審査員リーダー	学生審査員	学生審査員	学生審査員	学生審査員	教員審査員	教員審査員	教員審査員
S404	甲ゼミ 安井	甲ゼミ 本田	甲ゼミ 矢田	熊田ゼミ 長谷川	熊田ゼミ 西村	前川	栩木	宇治谷

### インスタレーション部門(13:50~17:10)

\* 16:00以降、佐々木直美審査員は森村審査員に交代する。

	審査員リーダー	学生審査員	学生審査員	学生審査員	学生審査員	教員審査員	教員審査員	教員審査員
全ての教室	松本ゼミ 森金	松本ゼミ 北山	松本ゼミ 則安	鈴木(晴)ゼミ 齋藤	鈴木(晴)ゼミ 宮本	佐々木直美	ジョルディ	曾

※補充審査員 岩川、甲、森村、島田、大嶋、フィールド、島野

A. 論文

場所	時間	タイトル	発表者	ページ
外濠 S201	13:30~14:00	アメリカにおけるヒスパニックの動きから見るラテン系音楽の人気	土方裕喜 (大西ゼミ)	8
	14:05~14:35	「参加」の再検討—中国貴州省における世銀プロジェクトから—	北井寛人 (松本・華井ゼミ)	8
	14:40~15:10	フェアトレードの現状と改善点	武藤夢実 (大西ゼミ)	9
	15:15~15:45	ドイツ語圏における言語地図を読み解く —バイエルン王国とハプスブルク帝国の交流史から—	吉川綾美 (熊田ゼミ)	10
	15:50~16:20	日本における障害者差別の歴史から考える共生社会の作り方	樋川聖佳 (熊田ゼミ)	11
	16:25~16:55	行政訴訟における和解の機能—下北沢の都市開発をめぐる住民運動を事例に—	大笠智志 (松本・華井ゼミ)	12
外濠 S202	13:30~14:00	人道的介入の在り方—ルワンダのジェノサイドを中心に—	岩井渉 (栗飯原ゼミ)	12
	14:05~14:35	「国際協力分野の誕生」	島田真希 (松本・華井ゼミ)	13
	14:40~15:10	ロシア文学にみる女性像	長田花純 (熊田ゼミ)	14
	15:15~15:45	盛り上がるブンデスリーガとJリーグの発展 —サッカー観戦による自己肯定感・幸福感をもとに—	永島春佳 (熊田ゼミ)	15
	15:50~16:20	戦後日本における戦争孤児—政府側の視点に着目して—	細井はるな (松本・華井ゼミ)	16
	16:25~16:55	長野県における地域おこし協力隊—阿南町をモデルケースとして—	WEI JIA (曾ゼミ)	17
外濠 S203	13:30~14:00	スペインにおける女性のありかたの問題をめぐる	前田美里 (大西ゼミ)	18
	14:05~14:35	飼い主の動物愛護意識と制度の関係性 英国と日本の犬の飼い主に着眼して	黒田悠里 (松本・華井ゼミ)	18
	14:40~15:10	“Black Lives Matter”の真意と残存する白人至上主義	伊東伸彦 (熊田ゼミ)	19
	15:15~15:45	浅草の観光地化—衰退から再興へ50年の歴史をひもとく—	柳谷愛 (松本・華井ゼミ)	20
	15:50~16:20	長崎県五島市の地域活性化に向けて—『内発的發展論』と小値賀町の事例を手掛かりに—	井野湧己 (曾ゼミ)	21
	16:25~16:55	備えとしての移民教育—タイで学ぶミャンマーの子どもたち—	冨田駿 (海外FS(松本先生))	22
外濠 S204	13:30~14:00	国際協力における写真の働き—国際協力カレンダーの写真選択のプロセスに着目して—	春田千尋 (松本・華井ゼミ)	23
	14:05~14:35	ミャンマー難民支援をめぐるジレンマ—時間のかかる本国帰還と縮小する援助の中で—	高橋唯 (海外FS(松本先生))	24
	14:40~15:10	在沖米軍基地の軍雇用員が抱える「矛盾」の様相 —「自治」と「復興」を中心に—	山田将士 (今泉ゼミ)	24
	15:15~15:45	映画『細雪』の英語字幕から考える翻訳の可能性	返町萌 (熊田ゼミ)	25
	15:50~16:20	フェアトレードの認定制度が抱える問題 —逗子市のフェアトレードタウンに向けた取り組みを事例に—	黒野靖裕 (松本・華井ゼミ)	26
	外濠 S301	13:30~14:00	多和田葉子『地球にちりばめられて』論 —私の「言葉」という普遍言語をめぐる—	日暮勇太
14:05~14:35		中国における「未識別民族」のアイデンティティの中核は何か —貴州省穿青人(チュアンチンレン)を例に—	江軍哲	28
14:40~15:10		中国初の民営生態博物館の現状と課題 —運営主体と観光形態の考察を中心として—	刁芸	28
15:15~15:45		グギ・ワ・ジオンゴのWizard of the Crowにおける翻訳行為の政治性と手法の分析	田平光希	29
15:50~16:20		中国における「国民統合」と「弱者救済」に関する考察 —北京における内地新疆班を事例として—	付栄	30
外濠 S302		13:30~14:00	日本における乗馬のスポーツ化とその消費動向	塚本紗英 (佐々木(一)ゼミ)
	14:05~14:35	都市ボランティアのもたらす周辺地域への影響—宮町の事例から— (仮)	日小田優希 (佐々木(一)ゼミ)	32
	14:40~15:10	日本のフェアトレード市場規模拡大と人的販売との関連について	田上紗帆 (佐々木(一)ゼミ)	32
	15:15~15:45	ソフト・パワーとしてのオリンピック—2020年東京が目指す姿	中野凧沙 (佐々木(一)ゼミ)	33
	15:50~16:20	プロスポーツとエンターテインメントの境界線—NFL、プロレス、eスポーツの事例から—	阿部洋介 (佐々木(一)ゼミ)	34
	16:25~16:55	ジャパンプランド化した「日本らしさ」—川越市の事例を通して—	小川礼乃 (佐々木(一)ゼミ)	35
	17:00~17:30	新規農業従事者と技能実習生の新たな関係性—千葉県富里市の事例から—	伊藤啓太 (佐々木(一)ゼミ)	36
外濠 S303	13:30~14:00	Acfun、Bilibili動画における弹幕言説分析のための予備的検討 —Jiebaによる中文形態素解析にもとづいて—	王博	37
	14:05~14:35	『ファミ通』アンケートから見る『Fate/Grand Order』というゲームの人気	湯華晟	38
	14:40~15:10	中国字幕組の著作権侵害をめぐる	趙学宇	38
	15:15~15:45	日本青春映画における青年像—『リリイ・シュシュのすべて』と『ユリイカ』を巡って—	陳瑩瑩	39
	15:50~16:20	bilibili動画におけるボーカロイド現象の研究—N次創作の分析を中心として—	屈嘉偉	40
	16:25~16:55	中国朝鮮族グローバル移動と民族意識—聞き取り調査を通じて—	金花	40

## B.ポスター

場所	時間	タイトル	発表者	ページ
外濠4階 ギャラリー	13:30	コンピュータエンタテインメントの制作とプログラミングの学習 —「難しい」は「面白い」へどう繋がるのか—	柳川実智（重定ゼミ）	41
		「地域」で生きるエコネット・美（ちゅら）—基地に頼らず命の自立	長澤穂乃花（今泉ゼミ）	41
	15:00	LGBT側が敗訴した裁判の判例からみる日本における同性婚の可能性	佐竹航弥（衣笠ゼミ）	42
		変化するまなざし—SNSによる観光行動とその弊害—	井野湧己（曾ゼミ）	43
	15:30	Pure Data・Arduinoを用いた音響エフェクター製作と制御インターフェースの検討	畑山武大（大嶋ゼミ）	44
		PureDataによるミュージックシンセサイザーのモデリングの試み —実験的FM音源の実装をめぐる—	大嶋先生	45
	17:00	少数民族の観光を考える—タイのエコミュージアムの試みから—	増田亜未（海外FS(松本先生)）	45
		出会いの場としての公園	辻晏己（甲ゼミ）	46
	17:00	『となりのトトロ』の表彰文化論	羽鳥大我（岡村ゼミ）	48
		スマートゾウと人間の衝突—共生への道を探る	田中苑子（中島ゼミ）	49
		明治維新150周年から見る地域振興と歴史の消費（仮）	本橋陽介（佐々木(一)ゼミ）	50

## C.映像

場所	時間	タイトル	発表者	ページ
S404	14:30~15:00	韓国のヒロシマ・ハプチョンからの想い ～日韓間で揺れた在韓被爆者～	太田陽久（鈴木(靖)ゼミ）	51
	15:10~15:40	壁	吉野そめい（島田ゼミ）	51
	15:50~16:10	Hiphop Hannyashingyo	山口紘一郎（島田ゼミ）	52

## D.インスタレーション

場所	時間	タイトル	発表者	ページ
S501	13:50~15:00	『Me—わたしの知らないわたし—』	大瀧愛莉（森村・川村ゼミ）	52
	16:00~17:10	承認のディストピア	神山千尋（岩川ゼミ）	53
S502	13:50~15:00	あなたに問う「桃太郎」—めでたし、めでたし?—	菅野優衣（熊田ゼミ）	54
	16:00~17:10	千new間	杉浦亜門（佐藤・稲垣ゼミ）	55
S503	13:50~15:00	芸術を疑え～言葉にできない体験とは～	佐藤真莉（甲ゼミ）	56
	16:00~17:10	当たり前を疑え!	今村渉（榎木ゼミ）	56
S504	13:50~15:00	世界遺産化による問題と改善～香川の四国遍路を例に～	山口満里奈（佐々木(直)ゼミ）	57
	16:00~17:10	Re-Framing ～親から子への虐待を批判的な視点で考える～	佐竹航弥（衣笠ゼミ）	58
S401	16:00~17:10	アフリカおじゃまします	末久笑子（粟飯原ゼミ）	59



## A.論文

発表者氏名：土方裕喜

所属ゼミ：大西ゼミ

タイトル：アメリカにおけるヒスパニックの動きから見るラテン系音楽の人気

発表概要：

「デスパシート」と聞いて何を思い浮かべるだろうか。「ゆっくりと」という意味のスペイン語だが、この意味を知らなくても多くの人々が一度はどこかで耳にしたことのある言葉だろう。その理由は近年、世界的なヒットを記録したある 1 曲の成功に求められる。

2017 年 1 月、プエルトリコ出身の歌手ルイス・フォンシとダディ・ヤンキーが「デスパシート」(Despacito)というスペイン語の楽曲をリリースした。同年 4 月にはカナダ出身の世界的ポップスターであるジャスティン・ビーバーによってカバーされたが、注目すべきは、彼が英語とスペイン語を織り交ぜて歌ったという点である。これによってスペイン語圏だけでなく英語圏にも広まり、世界的ヒットにつながった。さらに現在、この曲のヒットをきっかけにスペイン語やレゲエの要素を取り入れたラテン系音楽の人気が高まっている。実際にアメリカでもっとも権威ある音楽業界誌「ビルボード」が発表する人気ランキングの結果によると、2015 年と 2016 年は上位 100 位までに 5 曲以下だったスペイン語の楽曲が、「デスパシート」発売以降の 2017 年には 19 曲にまで増えている。これまでも日本語や韓国語の楽曲がビルボードで上位にランクインすることはあったが、いずれも一時的な人気にとどまった。

では、このような音楽の流行の背景には何があるのだろうか。「デスパシート」がリリースされた 2017 年、アメリカではドナルド・トランプが大統領に就任した。彼は白人至上主義を掲げ、「偉大なアメリカを取り戻す」というスローガンを柱に大統領選で勝利を収めた。これは白人が優位であ

ったアメリカ社会を取り戻すという意味であり、アメリカ国内最大のマイノリティ集団であるヒスパニックの人々さえも敵視する発言と取れる。アメリカでそのような考えを持つ大統領が選ばれた事実とは裏腹に、ラテン系音楽が現在多くの人々に注目されている理由は何だろうか。

現在進行形の現象ともいえるラテン系音楽の流行は、「人種のるつぼ」と形容される国で次第に存在感を増すヒスパニックの文化的影響力を象徴している。本発表では、アメリカ社会におけるヒスパニック人口の増加や言語、経済さらに過去の音楽の歴史を踏まえ、ラテン系音楽が人気を集めている秘密を探っていく。

発表者氏名：北井寛人

所属ゼミ：松本・華井ゼミ

タイトル：「参加」の再検討

—中国貴州省における世銀プロジェクトから—  
発表概要：

貧困問題の持続的な解決には住民の主体性や公平性が重要であるという考えから参加型開発は重視されるようになった(西川、1997)。一方、参加型開発をめぐる活発な議論が、実際に直面している問題の解決には至っておらず、具体的な事例から「参加」を解きほぐす必要性が問われている(小國、2002)。

本研究が扱うのは、中国貴州省の事例である。本事例の実施結果を世界銀行はプロジェクト実施報告書で報告している。しかし、小國(2002)は文書として提示された事業計画等は部分的に切り取られたものに過ぎないと指摘し、実践現場での調査を重要視した。そのため、本研究は貴州省で聞き取り調査を実施した。報告書の内容を現地調査で検証する方法から、貴州省での開発が政府主導と言われる中で(曾、2001)、住民参加を重視する世界銀行支援のプロジェクトがどのように実施されたのかを明らかにした。また、政府主導の国での参加

型開発の「成功事例」と評価された事業の分析を通して、参加型開発における論点を提示した。

結論の第一は、報告書に書かれた参加型開発のアプローチは、村の組織がファシリテーターに近い役割を務めることで実施されていたと考えられる。第二に、報告書で「参加を促進した」と評価されたトレーニングは確かに実施されていた。しかし、効果的か官僚主義的かで現地の評価は分かれていた。第三に、参加型開発の成果として報告書に書かれた住民の主体性や公平性については現地では全く異なる評価をしていた。特定の村人に利益がもたらされることや、村人がリスクを負わず受益のみをすることに否定的な捉え方をする意見は聞かれたが、報告書のような肯定的な評価は現地で聞かれなかった。

貴州省での事例の分析を通じて提示する論点は2つある。1つ目は、政府主導の開発における「参加」の可能性についてである。行政を担っている人と村のリーダーが重なっており、政府主導の開発が参加型開発の理念に反するわけではない可能性は、検討されるべき点である。2つ目は、主体性と公平性についてである。公平性の観点から行政の予算を提供した地元政府の対応は、結果的に村人の主体性を奪っていた。また、「参加」の実現のためには村人にリスクを負わせ、主体性を生み出す必要があるが、開発援助において村人にリスクを負わせることがはためらわれる。この2つの現状は、政府主導の国での事例を現地調査で分析することで明らかにした参加型開発の課題であり、重要な論点といえる。

小國和子「村落開発支援のダイナミクス—インドネシアにおける住民参加型開発事業の事例より—」千葉大学大学院社会文化科学研究科博士論文、2002年。

曾士才、「中国における民族観光の創出：貴州省の事例から」『民族学研究』66(1)、2001年、87-105頁。

西川潤編『社会開発 経済成長から人間中心型発展へ』有斐閣選書、1997年。

発表者氏名：武藤夢実

所属ゼミ：大西ゼミ

タイトル：フェアトレードの現状と改善点

発表概要：

格差社会が問題になっている現在、それを是正するための取り組みの一つとしてフェアトレード活動を活発化させたのはロンドンオリンピックとされている。食料品の調達基準にフェアトレードが盛り込まれており、選手村や全競技会場で提供されたコーヒー、紅茶、チョコレート、砂糖、バナナ、ワイン、オレンジにはすべてフェアトレード認定製品が使用された。そして大会開催中には、認定コーヒーが1000万杯、バナナは700万本も売れた。また、リオデジャネイロ五輪でもフェアトレード認定商品が提供されている。このことから、2020年に開催される東京オリンピックは、国内外でのフェアトレード認定製品の認知度を高め、多くの製品を売り込む絶好の機会とすることができるだろう。

私たちの所属する大西ゼミでは、スペイン語圏の文化や社会を幅広く研究している。そして研究を進めるうちに、スペイン語圏の中南米諸国では貧しい農民が多く、その原因として、生産した製品を適正な価格で買い取ってもらえないという問題があることがわかった。

そのような農家を支援するための仕組みにフェアトレードがある。フェアトレードとは、公正な国際貿易の実現を目指すパートナーシップのことであり、対話、透明性、敬意の精神に根ざしながら、立場の弱い開発途上国の生産者や労働者の生活改善と自立を支援する活動のことである。「国際フェアトレードラベル機構」(FLO)の定めた基準に適合する商品には認証ラベルが貼付され、店頭に並ぶ。

フェアトレードの浸透しているヨーロッパでは、認証ラベルの認知度は非常に高く、買い物の際の消費者の判断基準になっている。一方、日本での認知度は低く、消費者の10人中9人は何のためにラベルが貼られているのかさえ知らない状況である。フェアトレードのはらむ問題点についてもほとんど知られていない。

フェアトレードの問題点として、メキシコの例が挙げられる。1996年、コーヒーの認証制度の実施母体であるFLOは、その中南米支部として「中南米カリブ中小フェアトレード生産者調整機構」(CLAC)をメキシコに設立した。2004年に開催された会議では、製品ごとのネットワーク、中小農家の利益の促進、透明性の確保および環境への取り組み、中小農家向けの適切な基準作りなどが定められた。しかしその基準を満たすことは、中小農家にとっては困難なものであったため、中小農家を支援すべきフェアトレードが結果的に大企業にとって有利な制度となってしまうという問題が生じたのである。

それでは、どのようにすればこの問題を解決することができるのだろうか。本発表では、生産者と企業それぞれにとってフェアトレードが有するメリット、デメリット双方の観点から考えていきたい。また、現在のフェアトレードの仕組みをさらに有効な制度へと発展させていく方策について、さまざまな角度から検討を加えたい。

---

発表者氏名：吉川 綾美

所属ゼミ：熊田ゼミ

タイトル：ドイツ語圏における言語地図を読み解くーバイエルン王国とハプスブルク帝国の交流史からー

発表概要：

言語地図と国家地図は必ずしも一致するとは限らない。これはヨーロッパなどにおいて特に顕

著であり、それは様々な対立の歴史を経て国家の線引きが後からなされたためである。

本発表では、バイエルン・オーストリアドイツ語を取り上げ、バイエルンとオーストリアが同じ言語地域としてくくられることに着目する。バイエルンとハプスブルクの政治、経済、文化の相互関係が、特に18世紀、19世紀に深まることを確認し、それを通して文化的並びに言語的共通性を紐解いていくことを目的とする。

ドイツ語とは、インドヨーロッパ語族ゲルマン語派西ゲルマン語族に属する言語である。ヨーロッパにおいて最大の言語集団を形成し、話者は約1億3000万人で、そのうち母語話者は約1億人である。また、ドイツ語は方言の種別が多く、それぞれが活発に使用されている言語として知られている。これは長らく統一国家が成立していなかったというドイツ語圏の歴史的背景に裏付けされる。言語はナショナルアイデンティティ形成の中核的な要素であり、ドイツとオーストリアという異なった2つの国でありながら共通の言語を持っていることについての考察が本研究の中心となる。その社会を構築する下部構造が上部構造の形成に、どのような力学を発揮したのだろうか。より明確に国家の線引きがなされ始めた18世紀、19世紀の出来事に着目し、共通性を保ちながら、それでもなお個々のアイデンティティが作り上げられるに至るまでを論述する。

最初に、18世紀におけるバイエルン王国とハプスブルク帝国に関して、1740年から1748年にかけて行われたオーストリア継承戦争とそれがもたらした変化について詳述する。次に、19世紀においては1866年に起こった普墺戦争の結果、バイエルンが言語的文化的同一性を持つオーストリアではなく、ドイツに統一されていく過程についてまとめる。最後に、現在における、オーストリア人としてのアイデンティティについて、そしてバイエルンのドイツのなかでの独自性について述べる。

学部 SA では、ドイツとスイス両国に滞在した経験や、筆者自身も三重の方言を話すことにより、方言は単に発音やイントネーションの違いを示すものではなく、その土地の文化や自己認識に深く影響していることを身をもって感じている。熊田ゼミで学んでいる間文化的な立場から世界を考察するという姿勢で、ドイツ語圏における言語地図を歴史的背景並びに上部構造と下部構造の関連性から読み解いていく。

#### 【参考文献】

1. 坂野久「オーストリアドイツ語とアイデンティティ」『近畿大学語学教育部紀要』近畿大学、2008年
2. 大津留厚『ハプスブルクの実験－多文化共存を目指して』春風社、2007年
3. 谷口健治『バイエルン王国の誕生－ドイツにおける近代国家の形成』山川出版社、2003年

発表者氏名：樋川聖佳

所属ゼミ：熊田ゼミ

タイトル：日本における障害者差別の歴史から考える共生社会の作り方

発表概要：

本論文では、日本で起こった障害者への差別の歴史や法制度を読み解き、現在も続く差別問題について批判することで、異なる人間同士が互いに尊重し合い、共生する社会を実現するためにはどうしたらよいかを考える。

まず障害者とはどんな人を指す言葉なのか。障害者基本法（昭和45年法律第84号）第二条では、「身体障害、知的障害又は精神障害（以下「障害」と総称する。）があるため、継続的に日常生活又は社会生活に相当な制限を受ける者」と定義されている。「障害」という一言で表す中に、様々な人が含まれていることがわかる。定義に当てはまらない人でも、生きづらい特性を抱えている人が

いるだろう。「障害」という言葉は、その一言で表すにはあまりに多様な人々を抱えている。

日本における障害者は歴史のはじまりと共に現れる。『古事記』でイザナギとイザナミとの間に生まれる最初の子どもが障害者であり、その子どもは川に流される。神話の時代から存在する日本の障害者への差別的意識は、やがて伝来する仏教の因果応報の思想の広まりによって裏付けられる。江戸時代には障害者を見世物とする商売も行われる。その反面、障害者への支援が活発になったり障害者による芸術が有名になったりと、日本社会は障害者を抱えて歩んでいく。

しかし19世紀にヨーロッパで起こった優生学が日本に浸透し、やがて優生思想に基づいた国民優生法、優生保護法が成立する。強制不妊手術の被害者は現在も苦しんでおり、この問題は日本において忘れられてはならない出来事の一つとなる。優生思想は古い思想ではなく、現代を生きる個人の中にも潜んでいる。例えば、2016年に起こった相模原障害者施設殺傷事件がそれを物語っている。「障害者なんていなくなっしまえ」という犯人の言葉からは優生思想がはっきりと伺える。事件を起こさなくても、障害者を不要と差別する人はたくさんいる。この事件は今後も起こりうる事件なのだ。

相模原障害者施設殺傷事件の犯人が施設の元職員だったことにも注目したい。介護の現場には職員や家族の苦痛がある。障害者による暴力や、身内の障害を受け入れられないことが彼らを苦しめている。障害者と周囲の人々の双方を守るためには、福祉制度や双方への教育を更に充実させることが必要不可欠である。

先行研究として、森はな絵「知的障がい者との共生社会の実現」（『早稲田大学文化構想学部現代人間論系岡部ゼミ・ゼミ論文/卒業研究』早稲田大学、2011年）を引用する。この論文にもあるように、私たちに足りないのは当事者意識である。自分の子どもが障害を持って生まれてきた時に初めて

当事者となるのでは遅いのだ。個人が障害についての知識を得ることで、人と人との間にある隔絶を取り払い、異なる他者への偏見を無くすことが、全ての人間の幸福と共生社会の実現につながると考える。

---

発表者氏名：大筈 智志

所属ゼミ：松本・華井ゼミ

タイトル：行政訴訟における和解の機能

一下北沢の都市開発をめぐる住民運動を事例に

発表概要：

本研究は、行政訴訟の和解をテーマに論じる。行政訴訟の和解に関しては公害裁判の事例が豊富だが、損害賠償など金銭的救済が和解の意義とされている（長谷川 2003）。本研究では、損害賠償を求めている和解の事例を扱うことで、金銭的救済に代わる行政訴訟の新たな意義を見出すことができると考え、東京都・下北沢の都市開発計画をめぐる訴訟を事例に取り上げた。

下北沢の都市開発計画とは、小田急線の地下化に伴う道路事業、街を高層化する地区計画、そして小田急線跡地の利用計画のことである。これにより街の景観が大きく変わることを危惧した住民らを中心に反対運動が起き、行政訴訟に発展した。2006年9月に始まった訴訟は、2016年3月に和解をもって終了した。和解以前の都市開発をめぐる住民運動の展開は、三浦（2016）によって研究されている。そこで、本研究では下北沢の行政訴訟において「住民運動側の原告はどのように和解を受け入れ、その結果を運動主体がどう捉えたのか」を分析し、住民運動における和解の機能について考察する。文献調査と資料分析、運動主体へのインタビュー調査から以下の結論を導いた。

原告が和解を受け入れた背景は2点ある。第1に、原告は裁判を優位に進めていたが、行政訴訟で原告が勝訴することは難しいと認識しており、さ

らに裁判が長期化し疲弊していたことから和解での終了を最善と考えたことである。第2に、行政訴訟中に運動側が支持した区長が当選したため、区政が変化したことである。原告が事業認可の差し止めを求めていた道路事業の一部が凍結され、訴訟以前にはなかった行政と住民で街づくりについて議論する場がつけられた。

運動主体は、勝敗がつかず和解によって裁判が終了したことで、訴訟以前にはなかった行政と住民が協働しやすい状況が生まれたと肯定的に捉えていた。ただ、議論の結果が事業に反映されるかはまだ不明であり、一部の原告は議論する場の形骸化を懸念していた。

以上のことから考えられる和解の機能は2点ある。第1に、行政が住民と街づくりについて議論する場を設置したことで、行政訴訟によって分化していた運動主体が再び協働できるようになったことである。第2に、訴訟以前に問題視されていた行政が物事を決める構造から、住民と協働して物事を決めていく形に変化したことによって、住民の行政に対する立場が強くなったことである。

裁判の長期化は負担であるとされている中で、本事例のように訴訟を長年続けることで政治変化の機会を得る可能性があり、それにより問題解決の道筋が開かれることがある。それは、原告側にとって金銭的救済に代わる行政訴訟の新たな意義になると考えられる。

長谷川公一、2003『環境運動と新しい公共圏—環境社会学のパースペクティブ』有斐閣。

三浦倫平、2016『「共生」の都市社会学—下北沢の再開発問題のなかで考える』新曜社。

---

発表者氏名：岩井 涉

所属ゼミ：粟飯原文子ゼミ

タイトル：人道的介入の在り方〜ルワンダのジェノサイドを中心に〜

発表概要：

1994年4月から7月までの100日間に、約80万人のツチがフツに殺害されるという世界で稀に見る大量殺戮が行われた。虐殺の異様性と100日間で約80万人という凄まじい勢いから、ルワンダのジェノサイドは大きな注目を集め、多くの議論がなされてきた。特に、なぜ虐殺を止められなかったかという問いがルワンダのジェノサイド後にしばしば投げ掛けられてきた。その問いを思考するための糸口の一つとして、人道的介入について考察する。

人道援助の担い手は大きく分けて二つある。市民的立場にある「NGO」と、国際機関である「国際連合」（以降、国連と表記）がそれだ。本稿の目的はこれら二つの性質の異なる視点から人道支援を比較、考察することで、より多角的に人道的介入についての知見を広げることである。

ルワンダのジェノサイド時、NGOの大きな支援の一つとして、難民キャンプの設立があった。公平性、中立性を掲げるNGOは、人道的危機にある人々をツチ、フツ関係なく助けた。これに対し、フランスの国境なき医師団は、このような行為は犯罪的であり、無責任だと非難した。フツを国境近くに留め置くことで、戦争を長期化させたからである。つまり、目的は困っている人を分け隔てなく助けることだが、実際には、戦闘不可能な兵を戦闘に再び戻すための治療になっていたということだ。

一方の国連は、ジェノサイドの対応が後手後手に回っていた。国連加盟国、あるいは国連事務総長が平和維持活動の設置を提案するために3つの基本的条件を満たさなければいけない為だ。実際にルワンダ危機の際、それらの基本的条件が足枷となり、派遣ができない、または遅れることになった。ジェノサイドのように緊急を要する事例の場合、少しの遅れが致命的になってしまう。

NGOは介入主義的な為、安全保障を優先させ、平和構築の観点をなおざりにしすぎる。一方で国連は、頭脳である安保理によって意思決定を行う。

その為、平和構築学的考えを持ち合わせている一方で、意思決定に時間を要し、結果的に判断が遅れ、安全保障すら確保できない事態に陥ることもある。

また、人道的介入について考察する上で、もう一つ考えなければならない選択肢がある。介入しない方が平和構築に繋がるという「不介入主義」の考えである。

本研究は、ルワンダ危機の際に活動した一部のNGO団体、国連の活動について取り上げたにすぎず、人道的支援について網羅的に考察できたわけではないし、結論を見いだしたわけでもない。しかし、国連とNGOの人道的支援の功罪を比較し、不介入論まで考察の射程に入れ、人道的介入によって引き起こされる負の側面（濫用により武力行使の歯止めがなくなる、紛争が長期化・悪化する）と人道的介入をしなかった場合の負の側面（虐殺や迫害が行われている人々を見捨てる）の両面をルワンダ危機から考え、短絡的な介入に疑問を投げかけたところに意義がある。

発表者氏名：島田 真希

所属ゼミ：松本・華井ゼミ

タイトル：「国際協力分野の誕生」

発表概要：

国際協力の分野は年代とともに変化してきた。半世紀間の協力分野の変遷を追うことができる唯一の資料である青年海外協力隊の派遣分野に着目し、過去の募集要項や月刊誌などから調べた結果、389の分野が新たに追加され、324の分野がなくなっていた。国際協力の目的は大きく変わらない中で、これほどまでに必要とされる分野が変化している。筆者が学生団体として関わったカンボジアでの運動会支援も、2009年に始まった新しい協力分野である。

運動会支援とは、体育の授業のないカンボジアの農村部で運動会開催を日本から支援する活動であり、筆者が把握した範囲では現在9カ国で行わ

れている。従来教育セクターにおいては、万人のための教育やミレニアム開発目標などの国際社会の合意を受けて、基礎教育の質を高める動きが見られた。生活向上や教育という点では優先度が高いとは考えにくい情操教育の1つである体育の一環として行われる運動会が、なぜ国際協力の分野になりつつあるのだろうか。本研究ではカンボジアで運動会支援が実施されるようになった経緯と、それが他国に広まった理由を文献とインタビュー調査から明らかにし、新たな協力分野の誕生に目を向けることの意義について考察した。結論は以下の通りである。

運動会支援は既存の国際協力分野である体育授業の一環として始まり、派生的に生まれたといえる。カンボジアで体育スポーツ事業に従事していた青年海外協力隊員が、体育授業の成果発表の場として運動会を実施したのが始まりである。カンボジアには従来より運動会の種目に似た遊びがあり受け入れられやすい環境にあった。専門性を必要とせず誰でも支援しやすい協力形態であるため、2010年以降はNGO、民間企業、学生団体といった支援を行う団体が増えていった。また、日本で体育授業の研修したカンボジア教育省の行政官が運動会に関心を持ち、NGO、地方自治体、大学と協力してカンボジア政府自ら開催したことで、活動に継続性が生まれた。2020年に東京で開催予定のオリンピック・パラリンピックを見据え、日本の体育やスポーツを世界にアピールするという目的で政策を打ち出した日本政府の働きかけで、カンボジアだけでなくアフリカや東南アジアの国にも運動会が広がっていった。

国際協力は学校・インフラ建設など、既に決まった分野で進められている印象を持っていた。しかし今回調査した運動会は、様々なアクターによる現地での試行錯誤を経て、1つの国際協力分野に含まれつつある。現地で運動会が行われるようになったことで、教育分野において優先度の低い情操教育の支援を考えるきっかけが作られた。協力分

野が広がっていくことで、支援が多様になるといえる。国際協力研究ではどのように協力するのが効果的かという議論が多かったが、協力分野の変遷を更に研究することで、分野の特性から効果を議論することにつながるのではないかと考えた。

---

発表者氏名：長田花純

所属ゼミ：熊田泰章ゼミ

タイトル：ロシア文学にみる女性像

発表概要：

昨年「ロシア人女性の美的感覚を探る」という論文を書き、国際文化情報学会で発表した。SAでサンクトペテルブルクに滞在し、その地の女性のファッション、そして内面の生きざまに魅了されたことがきっかけであった。しかし、美的感覚というものは定義することが非常に難しく、何人かの女性を取り上げ分析するも、私の個人的見解によるものが多いものとなってしまった。これは昨年の大きな大きな反省点である。そして同時にもっと「女性」という点にスポットをあてて、ロシア人が理想としている女性像、逆に欠陥だと考えられている女性像を探る道はないかと考え、今回「ロシア文学」の視点から、女性がどう造形されているのか考察していくことにした。

その国の文学を読むということは、その国の人々、文化を知る一つの有効な手段である。その国に生きた作者によって、その理想や欠陥がにじみ出てくるからだ。昨年アンナカレーニナとエフゲーニオネーギンを取り上げたが、本発表では主にアンナカレーニナをさらに詳しく取り上げたい。

発表のおおまかな構成としては、第一章でトルストイとアンナカレーニナを扱う。この物語には主に二人の女性、アンナカレーニナとキティが登場する。アンナカレーニナは自らの自由を貫き不倫の道を選ぶ一方、キティは確実な結婚生活を送る女性として描かれる。この対比からトルストイは女性についてなにを描き出したかったのか。

ほかにもアンナの兄オブロンスキーの妻ドリーやレービンの兄の妻マリアなど、数多い女性の登場人物も交えて分析していく。また、作者トルストイ自身についても追っていくことにより、作中の女性たちの造形にどう関わったのかを考察する。

第二章では、ジェンダー論の中で女性がどのような位置にあったのかを見ていく。ロシア文学の最盛期である19世紀にはトルストイのほかにもプーシキン、ドストエフスキー、チャーホフなど有名な作家が多くいた。その作品とそこに登場する女性をピックアップする。

第三章では20世紀以降の最近のロシア文学をあげ、第二章までで見てきた作家たちによる女性像と比較する。そしてロシア文学における女性の在り方はどうであったのか、そこにどんな理想があったのかをまとめ上げていきたい。

やはり私は女性像に興味がある。女性たちがどのようなことを求められ、どう在ったのかを知りたい。本発表を通して文学作品とその作者からロシア文学における女性像を導き出し、現実における理想像を考察する。

#### 【一次資料】

1. トルストイ『アンナカレーニナ』木村浩訳、新潮文庫、1998年

#### 【参考文献】

1. 秋山秀子『魔女の系譜 ロシア文学の中のジェンダー』近代文芸社、1998年
2. 沼野恭子『アヴァンギャルドな女たち；ロシアの女性文化』五柳書院 2003年
3. 藤沼貴『トルストイ』第三文明社、2009年

発表者氏名：永島春佳

所属ゼミ：熊田ゼミ

タイトル：盛り上がるブンデスリーグとJリーグの発展～サッカー観戦による自己肯定感・幸福感をもとに～

#### 発表概要：

人間はそれぞれ様々な文化の中で生きていて、文化とは宗教、政治、日常生活などの総体であるのだが、スポーツも文化をなす総体の一部である。本発表では、スポーツ、特にサッカー観戦がもつ文化的価値を自己肯定感や幸福感の観点から定義し、日本とサッカー大国であるドイツとの比較を行う。ドイツ・サッカーの特色、マネジメントをもとに、日本・サッカーがさらに発展する着想を得ることを目的とする。

「なぜ人はサッカー観戦をするのか」幼いころから、よくサッカーの試合を観戦していたことや学部SAでドイツ語圏に留学し、たくさんのドイツ人が週末のサッカー観戦を楽しんでいる様子を見てきたことから、この疑問を抱いた。先行研究には、スポーツ観戦の目的は、勝利からもたらされる自己肯定感を求めるものや純粋にエンターテインメントとしてスポーツを楽しむものなど多岐に渡ると述べられていた。しかし、どの目的にも幸福感が共通しているとも述べられていた。これらの先行研究を参照しつつ、サッカー観戦がどのように自己肯定感や幸福感に影響を与えるか分析を行う。

ブンデスリーグ、ドイツのプロサッカーリーグは50年以上の歴史があり、観客動員数が世界一、年間5000億円以上の売り上げがある。一方、日本のプロサッカーリーグ、Jリーグは25年と歴史はまだ浅く、平均観客数は2万人弱、収益は35億円前後である。

最初に、両リーグの特色、マネジメントについて調査する。次に、ブンデスリーグの社会的影響について考察する。具体的にはブンデスリーグの収益とドイツ社会の関係性について追及する。最後に、ブンデスリーグがもたらす社会変化をもとに、Jリーグの問題を指摘し、さらなる発展について述べる。Jリーグには、収益、観客数など改善すべき点が多くある。ブンデスリーグとの比較を行い、問題解決につなげる。



私は、スポーツ観戦は人の生活を豊かにするものであると考えている。「サッカー観戦」の文化的価値を証明し、スポーツ観戦の意義を明らかにする。そして文化の比較考察により、ドイツと日本のサッカーの相違点を明らかにする。本研究がサッカーのみならずスポーツ観戦が持つ文化的価値、すなわち人々の自己肯定感、幸福感への貢献というものの理解を深め、さらに日本サッカー界の発展の一助に繋がることを願っている。

#### 【参考文献】

1. 佐藤晋太郎「スポーツ消費者の観戦目的特性と最終目的達成が満足度と幸せに与える影響」『スポーツ科学研究第 12 号』早稲田大学スポーツ科学学術院、2015 年 <http://waseda-sport.jp/paper/1506/1506.pdf> (2018 年 11 月 3 日参照)
2. 大矢賀一『ブンデスリーガはなぜ盛り上がるのか』上智大学経済学部、2012 年 <http://pweb.sophia.ac.jp/amikura/thesis/2012/oia.pdf> (2018 年 11 月 3 日参照)

---

発表者氏名：細井はるな

所属ゼミ：松本・華井ゼミ

タイトル：戦後日本における戦争孤児—政府側の視点に着目して—

発表概要：

2018 年現在、シリア内戦やミャンマーのロヒンギャ問題などの武力衝突によって多くの孤児が生み出されており、日本からも支援が行われている。第二次世界大戦後の日本にも、空襲によって親を亡くした戦争孤児が多く存在したが、戦争孤児は世間から冷たく扱われ、政府は何もしてくれなかったとしている(金田 2013)。一方で、政府による戦争孤児対策は、終戦直後存在していたとの先行研究もある(藤井 2016)。また、元軍人軍属は戦争被害に対する補償を国から受けているのに対して、

戦争孤児を含む空襲被害者は未だに補償をされていない。彼らは 1970 年代から補償を求める法案を国会に 14 回提出したが全て退けられており、戦後 73 年経ってもなお戦争被害の責任を国に訴えている。

以上のことから、本研究では次の 2 つの問いに取り組む。第 1 に「なぜ元戦争孤児が政府による支援がなかったと捉えるような状況に陥ったのか」、第 2 に、「空襲被害者の補償請求運動は、どのように政府に拒まれてきたのか」である。調査は主に文献調査や国会議事録のドキュメント分析を行い、以下の結論を導いた。

第 1 の問いについては、政府による支援は行われていたが、戦争孤児のみを取り上げたものではなく、世間から冷たい扱いを受けていた彼らの状況には対応しきれなかったと考えられる。そもそも戦争孤児である証明は孤児も政府も行うことができず、政府は浮浪児や里親制度など別の枠組みの中で支援に関する議論をせざるを得なかった。しかし、当時戦争孤児は労働力として家庭に引き取られたり、親がいないことで差別の対象とされたりするなど、戦争孤児は他の児童とは異なる状況に置かれていた。戦争孤児に対して配慮ある支援が行われなかったことで、彼らは複数の支援の枠組みの中に埋もれてしまったといえる。そして戦争孤児が成長し大人になることで、ついには救済の対象から外れてしまったと考えられる。

第 2 の問いについては、政府は軍人との補償の差は国家との雇用関係の有無とし、空襲被害者には戦争の被害を受忍することを求め、この方針が一貫して通されたと考えられる。その背景には、政府のこれまでの制度や方針に変化を与えることの難しさや、補償を求める団体の政治に訴えかける力の有無が関係していた。ここでも戦争孤児は空襲被害者という別の枠組みの中で自らの苦難を訴えなければならなかった。

現在、元戦争孤児の中には、戦争孤児の経験や存在を歴史に残すためにも限りある時間をかけて活

動を行っている人々がいる。彼らと共に検証を行える今だからこそ、当事者による視点だけでなく、本研究のように政府の対応を含め様々な視点から研究を積み重ねていくことも重要であると考えている。

金田茉莉 (2013)「終わりなき悲しみ—戦争孤児と震災被害者の類似性」コールサック社。

藤井常文 (2016)「戦争孤児と戦後児童保護の歴史」明石書店。

---

発表者氏名：WEI JIA (エイ カ)

所属ゼミ：曾士才ゼミ

タイトル：長野県における地域おこし協力隊—阿南町をモデルケースとして—

発表概要：

「研究背景」：

現在、多くの若者は大都市に集まりやすい傾向がある。それによって、都市の「極点社会」問題と地方の「市町村消滅」問題が出てきた。政府はそういった問題を改善すべく、様々な取り組みを行っている。特に総務省は地域力の創造と地方の再生のために、地域で働くことを支援する制度をいくつか作りあげた。

私は、そのうちの一つ、「地域おこし協力隊」という制度に着目した。この制度を知ったきっかけは、2017年度国際文化学部 SJ 国内研修に参加したときに、元地域おこし協力隊員との出会いだった。地域おこし協力隊の目的の一つは、人口減少や高齢化等の進行が著しい地方において、地域外の人材を積極的に誘致し、その定住・定着を図ることである。

「研究目的と仮説」：

本論文は、「地域おこし協力隊」という制度が成功したかどうか、また、果たして何をもって成功したと言えるのかを明らかにしたい。

仮説として、地域おこし協力隊員として地方に移住した人が、任期終了後もその場に定着し、定着率が高ければ、一応成功したと考えられるが、定着率だけでは測り知れない、地域おこし協力隊員と地元住民との深い絆ができれば、成功したと言えるのではないかと考えている。

「調査方法と調査対象の選定」：

総務省の地域おこし協力隊の定住状況等に係る調査結果によると、約 6 割の隊員が同じ地域に定住していることが分かった。

本論文で筆者は、長野県阿南町という特定の地域における地域おこし協力隊に絞り、データ分析とインタビュー調査を行った。

長野県阿南町という場所を選んだのは、まず地域おこし協力隊の都道府県別・隊員数ランキングでは、1位の北海道に次ぎ、2位が長野県だったことによる。そして、2017年に出会ったのが阿南町地域おこし協力隊の元隊員だったからだ。

「調査内容と結果」：

「阿南町地域おこし協力隊の任期終了後の動向」データによると、阿南町の地域おこし協力隊の任期終了後の定着率は 83.3%であることが分かった。そこで私は、なぜ阿南町の定着率が高いのかという疑問を持ち、元隊員はどういった理由で、任期終了後もそのままそこに定住しようと思ったのか？それを解明したく、2名の元隊員にインタビューし、フィールドワークを行った。

今回のフィールドワークから、2名の元隊員は、現役として活動している間、地元住民から「鈴が沢」ブランドの伝統野菜について学び、伝統野菜の大切さを知るようになった。そして、任期終了後もそこに定住しようと思ったきっかけの一つとなったのが、この伝統野菜を通して結ばれた地元住民との絆であった。現在、その2名の元隊員は、1名は生産者として、1名は仲介者として、伝統野菜を受け継ごうとしている。つまり、この制度が成功した

と言えるのは、定着率の高さだけではなく、元隊員が地域文化の継承者となり、地元住民と深い絆を結べたことが成功の証しと言えるのではないだろうか。

---

発表者氏名：前田美里

所属ゼミ：大西ゼミ

タイトル：スペインにおける女性のありかたの問題をめぐって

発表概要：

近年、男女平等にもとづく女性の地位向上を目指す動きは世界中で活発になっており、女性の権利の拡大や女性に対する差別と暴力の撤廃などを掲げるグローバルな運動がニュースにもしばしばとりあげられている。例えば、今年のノーベル平和賞の二人の受賞者は女性の権利向上に努め、その功績がたたえられた。

私たちの所属する大西ゼミは、スペイン語圏の文化や社会を幅広く研究するゼミである。今日、スペインでも女性の権利向上を目指す運動がかつてない盛り上がりを見せている。国連は3月8日を「国際女性デー」と定め、毎年世界各地で男女平等や女性の権利向上についてのイベントが催されている。スペインでは、2018年の国際女性デーに10組の労働団体や著名な政治家たちの支援を得て男女格差と性差別に反対する24時間のストライキが行われ、大きな反響を呼んだ。このストライキは、全国約200か所で530万人が参加する大規模なものとなった。

では、スペインにおいてこのような動きが盛んになっているのはなぜだろうか。その要因の1つは「ラ・マナーダ事件」である。この事件は2016年7月7日、スペイン・ナバーラ州のパンプローナで開催された牛追い祭りの最中に起きた。のちに事件の通称名となる「ラ・マナーダ」をグループ名とする5人の男性グループが、当時18歳の少女を集団で犯した。2018年4月、犯行グループに対

し「強姦罪」ではなく、それよりも刑の軽い「性的虐待罪」の判決が下されたいわゆる「ラ・マナーダ判決」を機に、全国で抗議運動が繰り広げられた。さらにこの判決をきっかけとして、ツイッターのハッシュタグから生まれたMeToo運動と同様、「あなたも語って」(#Cuéntalo)というハッシュタグが生まれた。これを通じて多くの女性が、おもに自らの性被害を告白しはじめたのである。さらに、マリアノ・ラホイ前政権が性犯罪にかかわる刑法の見直しを打ち出すなど、社会的影響が広がっている。

では、女性の権利向上を目指す一連の運動を生み出したスペイン社会は、歴史的にどのような変遷をたどってきたのだろうか。本発表では、独裁者プリモ・デ・リベラの圧政から解放され、女性の権利が大きく向上した第二共和政期以降の歴史を中心に、法制度の観点から追っていく。女性の権利の一定の向上がみられた第二共和政以後、内戦を経て成立したフランコ独裁政権下では、カトリックの倫理観に支えられた保守的な風潮のなかで女性の権利は抑圧された。1950年代にはフランコ体制内から女性の権利拡張を目指す民法改正の機運が生まれ、その流れは、フランコ死去後の民主化の時代に入っていよいよ本格化した。その後、中道左派政権の誕生とともに女性の地位向上がさらに推し進められた。

以上の歴史を踏まえながら、本発表では、現在のスペイン社会における女性の権利拡大を目指す運動を単なる一過性の現象に終わらせないためにはどうすればよいのかについて、検討を加えたい。

---

発表者氏名：黒田悠里

所属ゼミ：松本悟ゼミ

タイトル：飼い主の動物愛護意識と制度の関係性 英国と日本の犬の飼い主に着眼して

発表概要：

本研究の目的は、「犬を飼い始めてから最期まで飼い続ける」人々の存在に目を向け、法制度と飼い

主の動物愛護意識や行動の関連性を明らかにすることで、ペットに関連する諸問題の解決に向けた新たな視点を与えることである。

日本では、ペットの殺処分が問題となっている。2013年の法律改正で、行政の引取りの拒否が可能となり、年々殺処分数は減少している。しかし事態は好転するどころか、むしろ水面下で悪化している可能性も考えられる。その背景には、行政が引取りを拒否した犬を代わりに引き取って金もうけをする「引き取り屋」の増加や、殺処分の対象となる犬が動物愛護団体やボランティアによる積極的な引き取りがある。

先行研究では主な原因として、日本は欧州諸国と比べて動物愛護に関する法制度が未熟であり、また国民の動物愛護意識が低いことが挙げられている。しかし、それらが実際に飼い主の行動や選択にどのように影響しているのかというミクロな視点では研究されていない。

そこで本研究では日本と欧州で最も動物愛護の歴史が長いイギリスで、犬の入手、飼育やしつけの過程、診療、死別等を含む犬を飼う上での一連のプロセスに注目した。そこで、犬の一生を飼い主として経験したことのある両国の飼い主にインタビュー調査を行った。結論は以下のとおりである。

「飼い始める」「亡くなる」の2点に関わる日本の法制度は飼い主の選択肢を制限し得る。本人の意思がなくとも不幸な犬を生み出す負のサイクルの一部になってしまう可能性がある。犬を飼い始める際、日本では犬を簡単に手に入れることが出来るペットショップが主流であり、飼い主が犬を迎え入れる準備や家族との相談無しに簡単に犬を購入できる仕組みが整っている。一方、イギリスでは、犬の生体販売を行うペットショップは法律上禁止されており、ブリーダーから犬を購入するのが主である。死別においては、日本はイギリスほど安楽死という行為が受け入れられておらず、動物病院に断られるケースもある。その結果、飼い主が

犬の介護や世話を十分に行えないということがある。

しかし上記を除いた犬を飼う中での日常の一つ一つの選択の場面においては、犬を飼うことに対する責任などの意識や両国の飼い主の行動に個人差以上の明確な違いは見られなかった。つまり、法制度の不備はあるものの、両国の終生飼養する飼い主の間に行動や動物愛護意識に大きな差は無いと考えられる。これまでの一概に「法制度を変える」議論ではなく、飼い主の行動に直接影響する法制度は変えることに加え、責任をもって終生飼養するような意識・行動のある飼い主を増やすことによって法制度に不備が残されている日本の中でもペットにおける諸問題の軽減につながり得るのではないかと考える。

---

発表者氏名：伊東 伸彦

所属ゼミ：熊田ゼミ

タイトル：“Black Lives Matter”の真意と残存する白人至上主義

発表概要：

本発表では、SAと派遣留学という、それぞれ目的の異なった二つの留学を在学中に経験した一人の国際文化学部生の立場から、国際文化学部での学びをより体系的、実践的にするための一つの方法を提案したい。多くの学部内の学生が第二学年秋学期のSAのみを在学中の留学経験とするなかで、派遣留学生としてもう一度海外の大学に留学する意味と重要性を、発表者自身の派遣留学中の体験と学びに基づいて提示する。

私は2017年度秋期の派遣留学生としてアメリカ・マサチューセッツ州にあるウエストフィールド州立大学へと赴き、社会学を専攻した。そして、そこではアメリカ社会に根深く残る人種差別や偏見とステレオタイプ、白人至上主義を、大学内で起きた人種差別的な事件とそれに関連する動静を通して間近で目の当たりにした。留学生活が始まって

すぐの2017年9月末、大学敷地内にある寮の黒人女子学生が住む部屋の扉に差別的且つ性的な落書きがされる事件が起きた。直ちにこれに対する警察による捜査と大学を挙げての抗議集会が開かれ、キャンパス内の警備も強化されたが、黒人学生に対する似たような嫌がらせや、傷害事件が起きる等、事態はエスカレートしていき、犯人が捕まることもなかった。学内全体が不穏な空気に包まれる中、抗議運動のキーワードとして頻りに叫ばれていたのが“Black Lives Matter”（直訳：黒人の命は大切だ）という言葉である。

“Black Lives Matter”は、元々は白人警官による無抵抗の黒人への暴力と殺害に対する抗議運動にあたって生み出されたスローガンであったが、運動が全米、そして国際社会に影響を与えたことで、黒人への差別反対を訴えるための強力な標語へと変化した。“Black Lives Matter”には黒人の命も全ての人間と同じように当たり前に守られるべきであるという意味が内包されている。決して黒人の権利だけを特別に擁護することを訴えるものではなく、むしろそこには黒人の人権と命を踏みにじり続ける社会への怒りが込められている。

よくアメリカは人種の「るつぼ」と称されるが、現時点では全体の人口の7割を白人が占め、残りの3割を黒人やヒスパニック、ネイティブアメリカン、アジア系等の少数派の人種が占めている。(1)多様な人種とエスニシティが入り混じるなかでも、大多数を占める白人が中心的に存在するのだ。このような環境で、未だに事実上の白人至上主義が幅を利かせ、少数派の人種への差別と偏見が漫然とそこに横たわっている。“Black Lives Matter”のような、基本的な人権を主張するメッセージが標語として多くの人の支持を得たことが、端的にそれを示していると言える。

このような社会の様相は、実際に現地で事態を目の当たりにしないと掴むことが難しい。国際文化学部での学びを通して世界の多様さを理解するための一つの手段として、SAのみならず派遣留学

によって他の社会を深く観察し、同時に専門的な知識と観点を身につけることの意義を本発表によって提起したい。

(1) “U.S. Census Bureau QuickFacts: UNITED STATES.”

Census Bureau QuickFacts, 2017, [www.census.gov/quickfacts/fact/table/US/PST045217](http://www.census.gov/quickfacts/fact/table/US/PST045217).

---

発表者氏名：柳谷愛

所属ゼミ：松本・華井ゼミ

タイトル：浅草の観光地化—衰退から再興へ50年の歴史をひもとく—

発表概要：

本研究は、かつて娯楽産業で栄えていたものの、1960年代には「汚い、怖い、暗い」という印象を観光客に持たれて廃れていた浅草(森田 1997)が、どのように現在のような国内有数の観光地に再興したのかを明らかにする。

1960年代以降の浅草の観光地化に関わる団体の活動をまとめた文献はあるが、浅草がなぜ再観光地化したのかの背景を調査した学術的な論文はない。そこで当時浅草の復興に向けて立ち上がった浅草おかみさん会の活動内容を紹介する雑誌の記事(富永 2014)を手がかりに、その団体の理事長を起点にして1960年代以降の浅草の観光地化に関わる民間や行政計11団体16名に「芋づる式」インタビューを行った。調査の結果、浅草は3つの時期を経て再興したと考えられる。

第1期は、古き良き浅草の復興期である。担ぎ手不足の三社祭を活性化し、安全な町を取り戻し、汚れていた隅田川を浄化して隅田川花火大会を復活した。第2期は、奇抜なアイデアで町を売り込んだ時期である。日本初の二階建てバスの運行やサンバカーニバルの開催で観光客を呼び込んだ。第3

期は、浅草寺を中心にした恒常的な観光地化を目指した時期である。横浜から始まった人力車の走行や京都の真似をしたレンタル着物は最近始まったものである。現在浅草を訪れる人の大半はリピーターであり、イベント中心から個々の店の魅力化に向かっている。

浅草の半世紀を観光地化の成功例と考えるのは簡単である。現在日本は国を挙げて外国人観光客の増加を進めており有益な学びもあるだろう。しかし、忘れてはならないのは浅草の観光地化は目的ではなく結果だったことである。各団体がイベントなどを行ったのは、昔の浅草を取り戻したい、浅草を盛り上げたいという想いからであり、浅草の人と外部の人が協働し、浅草の歴史に潜むアイデアと他の観光地のアイデアを貪欲に取り入れ、新しいことに挑戦し続ける姿勢が結果的に浅草を観光地化させたと言える。

本研究では 1960 年代以降から現在に至るまでの台東区や地域住民や外部から参入してきた会社などの具体的なアクターの働きかけとその変化から、浅草の観光のプロセスを分析した。ただ観光客増加に影響を及ぼしたのは、区や地域住民の働きかけだけではなく、経済的、政治的、社会的の要因（好景気、円安、観光ビザ）などの影響も考えられ、それらの分析が不足していた点は本研究の限界である。しかし具体的なアクターの 50 年間の働きかけを分析することで、概念的な提示にとどまらず、観光まち作りの個別具体的なプロセスや苦悩を示したことには意義があるといえる。

富永照子 (2014) 「おかみさんパワーで蘇った観光地・浅草—ゴーストタウン浅草からパワースポット浅草へ」千葉商科大学『CUC view vision 38』18-23 頁。

森田新太郎 (1997) 『浅草繁盛の道—浅草観光連盟半世紀の軌跡—』小竹印刷。

発表者氏名：井野湧己

所属ゼミ：曾士才ゼミ

タイトル：長崎県五島市の地域活性化に向けて—『内発的発展論』と小値賀町の事例を手掛かりに—

発表概要：

#### 【研究背景】

本研究で取り上げる長崎県五島市は、本土から西方約 100km に位置する五島列島のうち、南側の福江島、久賀島、奈留島からなる地域である。私が 18 年間暮らした故郷であるが、東京への大学進学、海外留学など、故郷から距離的に離れていく中で、故郷の魅力と価値を再認識する一方で、故郷の抱える課題にも目を向けるようになった。その課題とは、都市との収入格差、雇用問題、若者の都市への流出などであった。そして、物質的な面（収入や雇用など経済的な面）と精神的な面（安心・安全・活気といった社会的な面）とのバランスがとれた地域活性化を実現したいと考え、研究を始めるに至った。

#### 【問い】

2012 年第二次安倍政権が①東京一極集中の是正、②日本全体の人口減少に歯止めをかけることの二つを目的とした政策「地方創生」を発表した。政府は、特区の創設や地方自治体への交付金など公的資金の活用によって目的達成を試みてきた。しかしながら、今現在、東京一極集中は減速することなく、また、人口減少に歯止めがかかる見込みも立たないままである。このことから、政府主導の施策に疑問を持つと同時に、どうすれば地域活性化が実現できるのかという疑問が湧いた。

#### 【研究目的】

本研究の目的は、研究対象地域である五島市で物質的・精神的な面でバランスの取れた地域活性化をいかにしてスピード感をもって実現できるか。そして、いかにして活性状態を維持するか、その方策を探ることにある。研究にあたっては、『内発的発展論』（鶴見 1976）、五島列島最北端に位置す

る長崎県北松浦郡小値賀町の事例などを手掛かりにして、本質的な課題解決方法を探る。

### 【結果】

五島市に限らず、持続的な地域活性化を実現するにあたり、「地域住民の内発性」、「キーパーソン」の存在の二つが必要条件であることを『内発的発展論』を通じて確認することができた。また、『地方消滅』（増田 2014）の中で記された六つの地域活性化モデル（産業誘致型、ベッドタウン型、学園都市型、コンパクトシティ型、公共財主導型、産業開発型）のうち、産業開発型のみが内発的発展の条件を満たし、五島市でも産業開発型を進めるべきであることを認識した。そして、産業の中でも第一次、第二次産業にも影響力があり、“長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産”の世界文化遺産登録を背景に注目を浴びている観光業に着目した。また、五島列島最北端に位置する小値賀町を離島観光における先行事例として取り扱った。結論として、「キーパーソンとなる人材の確保」「地域住民全体の内発性の醸成」「官民、第三セクターの連携」「五島市の観光におけるコンセプト策定」などが本研究の目的達成のために必要であるという考えに至った。

### 【参考文献】

鶴見和子編『内発的発展論』財団法人東京大学出版、1989年

増田寛也編著『地方消滅』中公新書、2014年

発表者氏名：富田駿

所属ゼミ：海外フィールドスクール（松本悟教授）

タイトル：備えとしての移民教育 -タイで学ぶミャンマーの子どもたち-

発表概要：

タイには多くのミャンマー人移民労働者がいる。家族同伴が多く、タイ語を話せない子弟への教育が課題とされてきた。その受け皿が移民学習センター（MLC）である。移民教育といえば、滞在国の

言語習得を支援すると考えるのが一般的だが、細井ら（2017）によれば、MLCではタイにしながらミャンマー語で授業を受けられ、しかもミャンマー政府が初等教育の修了資格を与えるカリキュラム（NFPE）を選択できるようになった。これによりミャンマーの学校へ編入学が可能になる。

細井ら（2017）の調査から2018年8月に行った本調査までの1年間に、NFPEを導入するMLCが増加し、更に中等教育の修了資格を得られるNFPEが試験的に導入された。同時期に移民労働者はタイ政府への登録期限を迎え、登録できずミャンマーに送還される者もいる。過去1年間のミャンマー政府公認のカリキュラムを導入するMLCの増加と、タイの移民労働者登録の厳格化には繋がりがあがるのか。本研究では、それに着目することで、2つの国の政策変化の中、移民労働者とその子弟が何を優先するかを明らかにする。

筆者らは、国際文化学部の海外フィールドスクールを通じ、MLC数最多のタイのターク県メーソット及び隣接するミャンマーのミャワディを訪れ、両国の教育行政機関と二校のMLCに聞き取り調査を行った。結果は以下の2点である。

第1に、導入の理由はミャンマー政府からの修了資格を、しかも通常教育よりも短期間で取得できる点が大きかった。このカリキュラムを導入することで得られるミャンマー政府の財政支援も理由の1つと考えられたが、今回の調査からは修了資格がより重視されていたと考えられる。

第2に、カリキュラム導入には移民労働者登録政策による影響があるといえる。まずこの政策で移民が将来ミャンマーに送還される懸念があることが導入に繋がっている可能性がある。また、登録により親の就労が保障され、滞在の長期化が見込まれる。登録の促進によって初等教育のNFPEだけでなく中等教育のNFPEが導入され継続的な教育支援の必要性が増すとも考えられる。

タイでミャンマーの修了資格が得られる制度は、移民労働者の家族や教育関係者には好意的に

受け入れられていた。しかし、実際に資格を用い編入学する生徒が多いかどうかは定かでない。NFPE や NFME というユニークな移民教育は、強制送還を含め、将来帰国しなければならない時のための「備えとしての教育」だといえる。

本研究は一般的なタイの移民教育を論じたものではないが、長期的にみると翻弄されていると思われる移民労働者とその子弟が、短期的には現実の変化に対応しようとしている一面を描いた点で意義がある。

#### 参考文献

細井はるな・他 (2017) 「タイにおける移民教育は どうなっていくか-諸アクターから見るミャンマーの子どもの将来像-」、2017 年度法政大学 懸賞論文佳作

発表者氏名：春田千尋

所属ゼミ：松本・華井ゼミ

タイトル：国際協力における写真の働き—国際協力カレンダーの写真選択のプロセスに着目して—

#### 発表概要：

多くの国際協力団体は、支援金の募集や支援国の現状を伝えるために写真を使用しており、写真の使用が寄付額の増加につながる一つの要素であるということも証明されている (Small, Loewenstein, Slovic, 2006)。写真は「正確である」という前提を使用者と読者が盲目的に信用しているために使用されるが (名取 1963)、使用者の意図せぬイメージを読者が受け取る場合もある。本研究では、国際協力において使用される写真の選択プロセスを見るために、国際協力フォトカレンダーに着目した。

問いは、「カレンダーの写真はどのように取捨選択されているのか」、また「どのようなイメージを受け手に伝えようとしているのか」の 2 つに取り

組む。調査対象として、日本国際ボランティアセンターの国際協力フォトカレンダーを選定し、1986 年度と 1989 年度から 2019 年度までに販売されたカレンダーの写真の分析を行った。また、2017 年度と 2018 年度のカレンダー事業担当者 2 名と 2017 年度の写真を提供した写真家へインタビュー調査を行った。結論は以下の通りである。

一つ目の問いに関しては、写真の取捨選択プロセスは三段階に分けられる。第一にテーマと写真家の設定、第二に担当者写真家それぞれによる写真の選定、第三に双方による協議のもと写真が選択されていた。写真の取捨選択は、商品として販売されるカレンダーの飾られて見続けられるという特徴が重要視されていた。そのため、季節感にあった写真の選定に加えて、購入者の意見や需要を反映した選定基準に基づいて行われていた。

二つ目の問いに関しては、選ばれた写真の多くは世界各地に住む人々の暮らしに焦点を当てたものであった。ここに担当者と写真家の「異なる地域の人々の生活を身近に感じてもらいたい」という気持ちが表れていた。また、年度毎に写真家や担当者が変わる一方で、カレンダーに採用される写真は人々の暮らしをありのままに写すものである傾向にあった。

本研究では、国際協力フォトカレンダーの写真の取捨選択に関わった 3 名のみへのインタビューにとどまったため、調査結果が全ての選定プロセスに当てはまるわけではない。また、国際協力における写真の使用目的を網羅できたわけではないということも限界であるといえる。

名取洋之助 (1963) 「写真の読みかた」岩波新書  
Deborah A. Small, George Loewenstein, Paul Slovic (2006) 「Sympathy and callousness: The impact of deliberative thought on donations to identifiable and statistical victims」*Organizational Behavior and Human Decision Processes* 102 (2007) 143-153



---

発表者氏名：高橋 唯

所属ゼミ：なし

タイトル：ミャンマー難民支援をめぐるジレンマ～時間のかかる本国帰還と縮小する援助の中で～

発表概要：

2018年現在、タイで生活するミャンマー難民は約10万人に及ぶ。ミャンマー難民は少数民族武装勢力と政府軍間の度重なる戦闘や、軍事政権による弾圧から逃れるため、国境を接するタイに避難してきた。2011年、ミャンマーは民政移管を果たし、これを受けてタイ・ミャンマー両政府は難民の本国帰還を進め始めた。しかし、これまでの帰還の実績を考慮するとキャンプ内の難民全員が本国に帰還するには相当な時間を要する。国際社会の関心はミャンマー国内へと移り、キャンプ内支援は手薄になりつつある。キャンプ内で支援活動を行うNGOは支援額の減少に伴う資金不足に直面している。

本稿では、難民を支援する団体に着目し、「国連機関が支援する帰還事業はなぜ迅速に進まないのか」、「NGOへの資金減少が難民の生活やキャンプ内支援にどのような影響を及ぼし、それに対し各支援団体はどのような対応をしているのか」という問いに取り組んだ。インタビューは、筆者らが国際文化学部の「海外フィールドスクール」を通しタイとミャンマーで実施した。調査対象はタイのメーソットに活動の拠点を置く国連機関のUNHCR、国際NGO(TBC、SVA)とミャンマーのミャワディに事務所を置くカレン民族武装組織のKNUの計4団体である。

文献調査と聞き取り調査の結果、帰還が進まない理由は2つある。第1に、ミャンマー側の治安と生活基盤の問題である。いまま散発的な武力衝突があるだけでなく、帰還先の生活インフラや生計手段が十分確保されていない。第2に、ミャン

マー政府への不信感である。UNHCRの支援を受けてタイ・ミャンマー両国政府が行う帰還プログラムでは、個人情報の提供を求められるが、ミャンマー政府への不信感からそれを拒否する難民が少ない。こうした状況に国連機関は難民の意思を尊重しながら両国政府らと調整しているため時間がかかる。

民政移管後、国際社会の関心はミャンマーの国づくりに移り、本国帰還の開始で難民キャンプへの支援も減少した。しかし上記の理由でキャンプの難民は減っておらず、難民支援を続ける国際NGOは資金難に陥っている。このまま難民の帰還が迅速に進まず難民がキャンプに滞在し続けると、キャンプ内支援の資金に限界が訪れ、難民は行き場をなくす可能性が考えられる。これに対し支援団体は活動に優先順位をつけ、難民への活動の委譲やスタッフの削減・減給などで対応している。資金の確保に固執するのではなく、新たな解決策として難民と良好な関係を築き、彼らの意志を尊重した活動を進めている。

活動のやり方を変えることで、資金が減少しても支援の効果をなるべく維持しようとするアプローチは、他の難民キャンプにおいても機能するのではないか。

久保忠行(2009)「タイの難民政策—ビルマ(ミャンマー)難民への対応から—」『タイ研究 第9号』pp79-97、日本タイ学会。

---

発表者氏名：山田将士

所属ゼミ：今泉ゼミ

タイトル：在沖米軍基地の軍雇用員が抱える「矛盾」の様相 — 「自治」と「復興」を中心に—

発表概要：

本論文では、基地に反対しながらも基地で働かなければならないという矛盾に葛藤する在沖米軍基地の軍雇用者の姿を浮き彫りにし、軍雇用者が

葛藤を抱えながらいかなる「自治」と「復興」を希求したのかを明らかにする。

東西冷戦が深刻化するなか、米軍は沖縄に戦略的価値があるとし、沖縄の長期的な保有と軍事基地拡充を決定した。1950年には米軍は、本格的に米軍基地の建設を開始し、「銃剣とブルドーザー」と表現される強制的な土地接収を各地で行った。こうして第二次世界大戦後の沖縄社会は、否応なく米軍基地の重圧にさらされていくことになった。

米軍基地の建設は沖縄住民にとって、生存のための生活空間を奪い、米軍がもたらす援助物資と基地労働に依存せざるをえない生活をもたらした。すなわち、住民は住む所もなければ、十分な食糧もなく、仕事もない中で米軍基地の労働者とならざるを得なかった。また、米軍による強制的な土地接収は、沖縄経済における産業構成、労働人口構成など様々な面に影響を与えた。例えば、軍用地の接収は住民の離農を促し、基地労働者の人口を増加させ基地労働を確立させた要因ともなった。

このように戦後の沖縄社会は米軍基地の重圧にさらされながらも、基地での雇用で住民は飢えをしのごことが出来たのである。しかし基地労働に生活の糧を得る人々も「基地問題」を抱えながら生きている。全駐留軍労働組合編『在日米軍基地の労働と地域-組み込まれた特異な構造-』（2010年。<http://www.gflu-oki.info/entry-1603.html>）では、基地に雇用機会を得ている基地労働者は、基地問題への不安及び葛藤と飢えからの解放という、まさにその狭間にあると指摘している。また、基地労働者が基地を否定せざるを得ないということは、生きようとする人間が生きてを否定することに等しい自己矛盾に陥ること、と分析している。

一方、鳥山淳『基地社会の起源と相克 1945-1956』（勁草書房、2013年）は、1956年に起こった「島ぐるみ闘争」までの沖縄社会を分析し、米軍による占領空間の中で、法的・制度的に実現された枠組みとしての「自治」ではなく、住民を突き動かす願望としての「自治」と、アメリカからの援助や

雇用に期待する「復興」は二項対立するものではないとする。むしろ、米軍占領下で「自治」と「復興」をいかに実現するのかという問いをめぐって生じる「断裂」であり、占領者である米軍に対していやおうなく両義的な立場を生み出し、そのはざままで沖縄社会はしばしば引き裂かれていったとする。

以上のような先行研究を踏まえ、本報告では基地労働者が葛藤する矛盾の様相、基地労働者の「自治」と「復興」をめぐる具体的な動きから明らかにする。

---

発表者氏名：返町萌

所属ゼミ：熊田ゼミ

タイトル：映画『細雪』の英語字幕から考える翻訳の可能性

発表概要：

本発表では、谷崎潤一郎の小説作品における言述表現を取り上げ、彼の作品の映画化とその映画の英語字幕翻訳に注目し、映像媒体における翻訳の制限、さらに固有の文化情報を他の文化に向けて構築し直す「翻訳」という行為の可能性と限界について探る。

谷崎作品における日本語表現は非常に流麗であり、その言葉の巧みさは今なお読者の感性を刺激する。彼の作品が高く評価される理由として、その独特の美意識もあるが、やはり彼の作品における日本語による表現力の高さが挙げられる。その日本語の豊かな表現、また後期作品における独特な上方方言の滑らかさは、谷崎作品の魅力である。今回、1983年に映画化された『細雪』と、それが英語翻訳され海外へ輸出された『The Makioka Sisters』という作品を中心に扱い、国内・国外双方からのこの映画に対する反応も踏まえつつ、この映像作品における字幕翻訳を、一部台詞と字幕を照らし合わせることで分析してゆく。

字幕翻訳には、ただ言葉を順次翻訳していくのとは異なる「時間」の制限がある。画面上に流

れる台詞の時間と、それを鑑賞者が字幕で読み解く時間があるのだ。したがって、その限られた時間の中では、否応なく翻訳上の大きな操作や翻訳しきれない場合が生じる。このように字幕翻訳において生じる制限との葛藤があるがゆえに、今回、小説としての翻訳ではなく、映画の字幕翻訳に注目した。また、この作品では、日本の上方の方言による台詞が主であるために、日本語を十全に使いこなす鑑賞者は、当時の文化へ思いを馳せ、谷崎が表現しようとした女性の優美さを感じ取ることができらう。しかし、こうした谷崎の日本語言表の精細さは、字幕翻訳においてはどの程度保持され、また英語に依拠する鑑賞者にそれらがどのように伝わっているのか、検討を要する。しかし、現に、海外においても、この映画は映像の美しさも含めて、その流麗さが評価されている。したがって、映像や音がある映画という媒体だからこそ、谷崎が小説によって表現しようとした日本と日本語の美しさが、海外の人に対しても、字幕を通してより理解しやすいものとなっているのではないかと考えられる。

映像化を伴う翻訳は、そこに制限や完全な翻訳はありえないという葛藤があるが、文化と文化をつなぐ橋渡しの役目を果たし、時に文字以上の情報量をも伝達しうる可能性を秘めたものとして、その力に私たちは異文化交流の希望を抱くことができる。

一次資料：谷崎潤一郎『細雪』 新潮社、1955年  
市川崑監督『細雪』東宝、1983年（DVD、東宝、2004年）

同上英語翻訳版“The Makioka Sisters” 東宝、1983年（DVD、東宝、2011年）

参考文献：篠原有子「映画『おくりびと』の英語字幕における異文化要素(日本的有標性)の翻訳方略に関する考察」日本通訳翻訳学会編『翻訳研究への招待第9号』日本通訳翻訳学会、2013年

発表者氏名：黒野 靖裕

所属ゼミ：松本・華井ゼミ

タイトル：「フェアトレードの認定制度が抱える問題—逗子市のフェアトレードタウンに向けた取り組みを事例に一」

発表概要：

私たちが口にする紅茶やコーヒーの原料を生産する国々では、生産者が安い価格で商品を買叩かれ、過酷な生活環境におかれている。こうした問題を解決する手段の1つとして、認証機関によって生産者への正当な支払いを保証されたフェアトレード商品の販売がある。

この商品を地域内の行政、商店、市民団体等が一体となって消費・販売することで、購入意欲が低かった消費者等にも販売の輪を拡大し、生産者の問題解決により効果的な役割を果たそうとする取り組みがある。「フェアトレード商品を扱う商店の数」等、5つの基準を満たした都市はフェアトレードタウンに認定され、2018年までに世界2067都市、日本では4都市が認定されている。しかし認定数が増える中、商店や推進団体といった関係者の取り組みが認定後に低調となることから、基準を満たした後の取り組みをどのように維持・発展させるかが大きな課題である（渡辺 2012）。

先行研究ですでに認定までのプロセスは明らかにされているため、本研究は逗子市という1つの都市の認定後の取り組みに着目し、行政・市民団体・商店へのインタビュー調査から維持・発展という課題を具体的に検証する。「なぜ認定された後の取り組みが低調になるのか」という問いに取り組み、以下の結論を導いた。

認定後の課題は全ての人々に当てはまるわけではなかった。低調になる例としては市内の商店が挙げられ、推進団体からの依頼で「フェアトレード商品を扱う商店の数」の基準をクリアするために商品を置き始めるが、認定後に自ら仕入れを行う、顧客に声をかけて販売を行う等の姿勢は見られなかった。原因は「フェアトレードタウンになること

で地域が活気づくなら」という想いで協力を始め、最初から商品の販売よりも基準のクリアが目的になっていたためである。この背景には商品を「置くだけ」でクリアできてしまう認定基準がある。

一方で行政は多様な取り組みを始めた。行政の関心は認定後、いかに「フェアトレードタウン逗子」として地域内外にシティプロモーションをするかにあり、観光商品としてのフェアトレード商品の開発、地域内外に向けたイベントの実施等、認定後に取り組みは縮小しなかった。

以上のことから取り組みの維持・発展のためには、一部の基準の再考が必要である。逗子市ではフェアトレード商品の消費・販売の拡大という本来の目的とは違うものの、取り組みが活性化する例が見られたため、取り組みの内容を制限するような基準が必ずしも効果があるとは言えない。フェアトレードタウンは、フェアトレード商品の市場が世界市場の1%と他の先進国と比べて小さい日本で、販売・消費の機運を高めようとする点では意義のある取り組みであり、名ばかりの認定制度にならないためにも今後は事例研究の積み重ねが必要である。

渡辺龍也(2012)「フェアトレードタウン運動:その意義と課題」第21号、83-130頁。

発表者氏名：日暮勇太

指導教員：リービ英雄

タイトル：多和田葉子『地球にちりばめられて』  
論—私の「言葉」という普遍言語をめぐる—

発表概要：

スラヴ文学者の沼野充義は1998年に発表された評論『世界の中の日本文学』において、「半世紀以上続いた戦後を経て、日本文学は大きく変わった。いや、変わったのは、むしろ、日本文学を取り巻く環境と日本文学の「境界」のほうだったのかもしれない」、「外人」でありながら日本文化に通じ

ている者は珍しくないし、日本語で小説を書く注目すべき外国人作家も何人が登場している。その反面、新しい世代の中からは、日本人でありながら、言語と文化の国境を越えて外国語で作品を書く作家もまた現れている(中略)いま日本文学はまさにそういう転換期を迎えているのではないだろうか」と述べ、この中で沼野は「外国人でありながら日本語で書く作家」としてリービ英雄を、そして「日本人でありながら外国語で書く作家」として多和田葉子の名前を挙げた。彼らは沼野が見出したこれからの「新しい作家」の例であるが、彼らが出現した以降も、日本国籍を持たない初の芥川龍之介賞受賞者となった楊逸やカナダ在住のフランス語作家のアキ・シマザキといった母語の外で書く作家——多和田が言い表すところの「エクソフォニー作家」——は着実に現れ始めた。こうした現象は文学の分野のみに留まらず、自ら海外に出て行って外国文化の中に入り込んでいく日本人も居れば、逆に海外から日本の伝統芸能や伝統工芸を学びに訪れ、今や日本人以上にそれらに精通し継承していく役割を担った外国人も少なくない。先述した沼野の評論が発表されてから約20年が経とうとしているが、我々の生きる現代はもはやかつての沼野の予見を越えていった「その先」に位置していることは以上の事実からして明らかである。

その中でも、多和田葉子は現在ベルリンに在住し、日本語とドイツ語の双方で執筆を続け、2014年には日本で読売文学賞を受賞し、2016年にはドイツでクライスト賞を日本人では初めて受賞するなど、双方の文化圏で高く評価されている作家である。彼女の作品において特徴的なのが、日本とドイツ、更にはその他諸外国を街頭に立つようなミクロな視点から具な描写、経験に裏打ちされた多言語・多文化横断的な表現であり、こうした作品を通じて読者にもたらされてきたのは、物理的な国境と精神的なバイアスを越えるような二重の意味での「脱境界化」である。そして、今回2018年に発売された長編、多和田葉子の新たな「代表作

(サーガ)」たる『地球にちりばめられて』において何が表現されたのか、国際文化学的な広い観点から分析・考察し、彼女が書いた「私の言葉という普遍言語」をめぐるものについて明らかにしていきたい。同時に、本作と同様に動的な世界を捉えるという意味では「未成」である国際文化学を考える上で、外の観点を持った人物によって書かれた著作がどのような役割を果たし得るのかも示したいと考える。

---

発表者氏名：江 軍哲

指導教員：曾士才

タイトル：中国における「未識別民族」のアイデンティティの中核は何か—貴州省穿青人（チュアン チン レン）を例に一

発表概要：

#### 1、研究概要

本研究は、貴州省に居住している穿青人を対象にし、中国における「未識別民族」のアイデンティティ維持のあり方を究明したい。貴州省畢節市織金県、納庸県の両地を中心にフィールドワークを行い、穿青人のアイデンティティの中核を確認したい。

#### 2、問題提起と研究目的

中国は、56 民族以外、「未識別民族」という特殊なグループが存在している。「未識別民族」とは、1950 年代および 1980 年代の民族識別工作で、正式の民族として認定されなかったが、独自のアイデンティティを持っているため、自らは単一の少数民族であると主張している集団である。私は、国から単一の少数民族として認められていない彼らは、長い時間をかけて、どうやって自らのアイデンティティを獲得してきたのかに関心を持っている。

そこで、未識別民族の中でも比較的人口が多い（67 万人、第 5 回人口調査）穿青人を対象に、彼らのアイデンティティの形成過程を明らかにすれば、エスニック・マイノリティが集団内部に多様性

を有しながらも、集団としての独自性をどのように維持しているのかを見つけることができるのではないかと考えた。

#### 3、仮説

これまで全ての先行研究は、疑問の余地なく、穿青人のアイデンティティの中核は「青（チン 黒に近い）色」の服装であると主張しているが、私は、一部地域にしか残ってない服装より、五頭神の信仰こそが中核ではないかと考えた。

#### 4、研究進度

2018 年春学期に、穿青人に関する先行文献（論文）を読み終わり、夏休みには織金県や納庸県に行き、フィールドワークを行った（穿青人は主に貴州省畢節、安順地域を中心に住んでいる。特に、織金県、納庸県に多い（30 万人弱））。一回目の調査では、2 人の知識人、1 人の道士と対話することができた。また、3 人以外に、ホテルのオーナー、受付の方、村に住んでいる方々とも、「質問事項」に従い、短い会話をした。調査の結果、「服装が中核である」と認識している方がいなく、穿青人のことを全く知らない人以外、すべての穿青人は、「五頭神への信仰があるから、アイデンティティが維持できている」と述べた。

本発表は、貴州省織金以那鎮、納庸勺窩郷におけるフィールドワークに基づいた中間報告である。今後は、織金県の桂果鎮にある「穿青人服装ミュージアム」などを調査し、知見を深めたい。

---

発表者氏名：刁芸

指導教員：曾士才

タイトル：中国初の民営生態博物館の現状と課題—運営主体と観光形態の考察を中心として—

発表概要：

本研究は、フランスから導入されてきた生態博物館の概念と実践が中国の貧困地帯である貴州省でどのように受容され、展開していたのかを考

察し、主に、中国初の民営生態博物館の運営主体と生

態博物館が展開している地域の観光形態の現状と課題を明らかにしたい。

1998年から、六枝梭戛、花溪鎮山、隆里古城、堂安の四ヶ所に官営生態博物館を設立された。2005年には、中国初の民営地湄侗族人文生態博物館が設立された。

「我々がやりたいのは、地湄人文生態博物館の設立によって、文化保護と地域発展とを結びつけ、生態博物館の模範になること」と地湄侗族人文生態博物館館長である任和昕が述べている。生態博物館の理念を実践する上で、民営企業が主体となっていく文化遺産の保護と文化資源を活用した観光開発の現状はどうか、文化保護と経済発展との調和において果たす役割に注目した。また、民営生態博物館は、官営生態博物館の行政的な運営管理より柔軟、あるいはよりよい管理ができるのかどうかにも関心を持った。

この研究では、民営地湄人文生態博物館をめぐって、①博物館の運営管理、②文化保護の仕方、③博物館が進めている観光形態、そして生態博物館の理念との関係を明らかにしたい。

報告者は、2017年の夏休みに7月31日から8月12日までの十三日間と2018年の春休みに2月20日から3月11日までの二十日間、貴州省黎平県の地湄村と錦平県の隆里郷で実地調査を行った。

実地調査の結果、次のことが分かった。

①運営・管理面では、社会主義中国においては、民営生態博物館であろうと官営であろうと、運営・管理を円滑に行うために、政府の認可、支持を取り付ける必要がある。

②地湄生態博物館がこれまで維持できたのには、任和昕氏個人の力（経験、知識、人脈）に負うところが大きい。

③文化の保護面では、たとえば、外部の若手建築家を招き、既存の建築物に工夫を加え、再利用する

ことによって新しい命を与え、継続的に使用している（「茅貢計画」の実践）。このようなリノベーションも一種の文化保護の形式と考えられる。

④観光活動面では、MICE観光や都会の親子の農村体験など、官営博物館にはないユニークな観光形態の取り組みを行っている。

現状では、地湄生態博物館の活動には限りがあり、地域経済の振興や地元住民の生活向上には結びついていないと言いがたい。しかし、貴州省の他の官営生態博物館と比べると、民営の方には、民間の企業や各分野の専門家の参与や特徴的な観光形態を試行する柔軟性を有しており、今後の可能性に期待したい。

発表者氏名：田平光希

指導教員：粟飯原文子先生

タイトル：グギ・ワ・ジオンゴの Wizard of the Crow における翻訳行為の政治性と手法の分析

発表概要：

グギ・ワ・ジオンゴの Wizard of the Crow における翻訳行為の政治性と手法の分析に関して、発表をする。

グギはケニア生まれの作家であり、小説や評論を多数発表している。小説では、Weep not, Child (1964)、The River Between (1965)、A Grain of Wheat (1967)、Petals of Blood (1977) は英語で書かれたが、Devil on the Cross (1980)、Matigari (1986)、Wizard of the Crow (2004) はギクユ語で書かれた。ギクユ語での執筆は、評論集 Decolonising the Mind - The Politics of Language in African Literature (1986) の中で宣言された、帝国主義の言語であるヨーロッパ言語ではなく、アフリカの言語で小説を書くことの実践である。しかし、その宣言から約20年後に発表された Wizard of the Crow が、グギ自身により、ギクユ語から英語へと翻訳されていること（とその意味）はしばしば見逃されがちである。

今回の発表では、分析の結果として、英語版の読者にギクユ語版を意識させるためにグギ自身が翻訳を行っており、小説の内容や形式もその目的を達成するために選ばれているということの論証を行う。

論証のひとつは、1980年時点でグギにより英語へと翻訳された *Devil on the Cross* や、第三者により英語翻訳がされた *Matigari* についての論考の整理や分析である。また、*Wizard of the Crow* のテキスト分析として、自分の作品を自分で翻訳するという「自己翻訳」の研究を参照しながら、ギクユ語を意識するように翻訳がされている例や、小説の内容や形式が、英語とギクユ語の両義性を持つものが選ばれていることの例を取りあげたい。

なお、先行研究として、*Wizard of the Crow* をグギ自身が翻訳していることに着目した研究はないように思われる。ケニアの第二代目大統領モイ政権の腐敗を諷刺したものであるという基本的な読解や、グギが発表した他の小説との関連性を論じる作家論が見られる。またアフリカの伝統的な口承文学の系譜を論じたものや、口承文学以外の文学ジャンル（独裁者小説、マジックリアリズム、ディストピア小説、SF小説、ゴシック小説）に位置づける論考が多い。

発表者氏名：付栄

指導教員：曾士才

タイトル：中国における「国民統合」と「弱者救済」に関する考察—北京における内地新疆班を事例として—

発表概要：

#### 【研究背景と目的】

中国の少数民族教育は、常に「国民統合」を最も重要な目的とし、民族教育も漢族と分離せず、統合教育を実施している。2000年代の少数民族教育支援は、「国民統合」と「社会的弱者の救済」とい

う二つの目的の関係をとることに工夫を凝らすことになる。その典型例が、中国国務院が1999年9月に「関与進歩加強少数民族地区人材培養工作的意見」という通知文書を出し、発展地域の12都市の15カ所の高校で、「内地新疆班」と呼ばれる特別クラスを設置する方針を出したことである。

本研究では、中国の首都北京市における内地新疆班を事例にして、その実態や生徒のアイデンティティ変化を明らかにしたい。その上で、「内地新疆班」という少数民族に対する教育支援政策を切り口とし、教育による脱貧困化の現状と、「国民統合」と「弱者救済」の効果を考察することを本研究の目的とする。

#### 【内地新疆班】

1. 新疆の位置づけ：分離独立の動きや貧困問題
2. 新疆クラスの概況：①生徒募集における優遇措置、②選抜過程における公平性、③費用面についての優遇措置、④4年間の修業年限という四つの特色が挙げられる。
3. 内地新疆班に関する先行研究：①政策研究、②生徒に対しての徳育に関する研究、③新疆クラスで行われる教授法に関する研究、④学校生活における生徒の適応に関する研究に分けられる。最後に、本研究では、社会的弱者への救済と国民統合の二つの面から、新疆班の生徒たちのナショナル・アイデンティティとエスニック・アイデンティティの実態を考察する。

#### 【研究方法】

対象：中国北京市順義区楊鎮第一中学新疆班の少数民族在学学生120人とその卒業生3人

方法：質問紙調査法、面接法、追跡調査

#### 【質問紙調査】

2017年12月と2018年8月に、北京楊鎮第一中学で新疆班の現役生徒800人の中から120人を抽出して、アンケート調査を実施した。調査票有効回収率は97.5%である。

アンケート内容：①行動的側面において、例えば、どんな場面で何言語をどれくらい使用している、

中国と自民族の伝統文化行事にどのくらい参加しているかなどの設問を設定した。②認知的側面を測定するために、設問項目の内容は、中国や新疆の関心事に対する態度、中華民族や少数民族の伝統文化に対する関心度、中国や少数民族集団への帰属感、などがある。③新疆班プログラムが経済面の援助に対しての満足度。

#### 【面接法】

内地新疆班に入る前、内地新疆班の4年間、内地新疆班から卒業後の3つの段階に分けて、それぞれの段階において、対象者のアイデンティティ形成に関連があると考えられるライフストーリーを取り上げ、彼らの話を分析した。

発表者氏名：塚本紗英

所属ゼミ：佐々木一恵ゼミ

タイトル：日本における乗馬のスポーツ化とその消費動向

発表概要：

現在、日常生活で馬の存在を身近に感じる人はあまり多くないだろう。しかし馬は日本においても、古代より交通、運輸、農耕、催事、スポーツ、また戦争に利用されてきた。明治維新後には、政府が国家事業として軍馬の馬種・馬格の改良を行い大型馬を生産、後に民間にも普及し馬耕や馬車の普及に繋がった。また、列強諸国に並ぶため、日本にも古来からの和式馬術が存在したが、軍隊を中心とし様式馬術の導入が強行された。しかし、第二次世界大戦後、近代馬術の主導であった軍の解体や昭和30年代のモータリゼーションによって、馬の存在範囲は急激に狭まり、馴染みのないものへと変わっていった。しかし、高度経済成長期に入った1960年代から1990年半ばまでの時期に注目すると、現在まで存続するものに限っても55を超える乗馬クラブが設立し、当時の読売新聞や毎日新聞の記事は、女性が中心のブームを伝えている。乗馬クラブとは、会員や訪れたお客様に対し、スポー

ツとして馬の乗り方や技術を教えるスポーツ施設の事だ。乗馬クラブの多くは、イギリスが源流となるブリティッシュ馬術を教えている。また新聞記事には、女性中心、貴族的な少数派のスポーツでエレガント、ステータス、美容と健康、ダイエット、女性用乗馬ウェアの流行といったワードが多くみられた。

本発表では、まず日常生活において賭博である競馬を除き一度存在を消した馬が、乗馬クラブを介したスポーツとして大衆がアクセスできるものへ変貌した要因を明らかにする。そして、乗馬が貴族的な少数派のスポーツ、ステータスと捉えられていた事から、見せびらかしの消費の面があるのではないかと考え、ウェブレンの『有閑階級の理論』の「顕示的閑暇と消費」という概念を参照に、乗馬クラブができ、スポーツとして確立された時期の乗馬の消費のされ方を分析する。またもう一つの観点として、筆者が実際に中学1年生から、高校3年生まで6年ほど乗馬クラブに通い、多くの乗馬を楽しむ人と関わった中で、乗馬の目的に馬との触れ合いやコミュニケーションで癒される、という人が多かった事に注目する。ここから、再度乗馬クラブを訪れる人へ乗馬の目的についてインタビューを行い、このスポーツが精神的な癒しとして消費されているかを検証する。精神的な癒しとは、『広辞苑第五版』に記載された「癒す」の意味である「病気や怪我をなおす。心の悩みを解消する。」といった、人が抱える深刻な問題を解決する事ではなく、『広辞苑第六版』に収録された「癒し系」という語が表す「心を和ませるような雰囲気や効果を持つ一連のもの。」とする。

参考文献

ウェブレン 『有閑階級の理論』小原敬士役、岩波書店、1961年。

神崎宣武 『近代一馬と日本史』財団法人馬事文化財団、1994年。

千葉幹夫 『馬術—近代馬術の発達』財団法人馬事文化財団、1994年。



---

発表者氏名：日小田優希

所属ゼミ：佐々木一恵ゼミ

タイトル：都市ボランティアのもたらす周辺地域への影響——宮町の事例から——（仮）

発表概要：

現在、日本全体が2020年東京オリンピックに向け交通や観光などの様々な面で準備を進めている。1964年の東京オリンピック開催時は、前年に観光基本法が制定され、現在と同じようにオリンピックに向け観光面での準備が行われた。またこの法を改正し2007年に施行された観光立国推進基本法では、関係者を国、地方公共団体、住民、観光事業者の4種に分け、それぞれに責務があると定めている。ここでは政府や観光事業者だけでなく住民にも責務があるとされており、このことから国民が一体となって観光へ携わっていくよう求められていることがわかる。これは特に、近年話題になっている「観光まちづくり」に関連することである。こうした国を上げての観光事業にとって、大きな機会の一つに東京オリンピック2020がある。2018年9月26日から東京オリンピックに向け、東京オリンピック委員会によって大会ボランティア、また競技開催都市で都市ボランティアの募集が開始された。大会ボランティアとは、大会運営や競技運営を支えるものであり、都市ボランティアとは、空港や主要駅において観光・交通案内などを行うボランティアである。今回は観光面のボランティアを行う都市ボランティアに注目する。東京都の都市ボランティアの募集人数30000人のうち約5000人が観光案内や東京のPRなどに関わることになっている。さらに、他の首都圏の競技会場のある県でも数百人から数千人の募集が行われている。

観光ボランティアガイドとは人に自慢できる豊かで楽しいまちづくりに寄与する社会的事業に自発的に参加する人であり、その活動は地域や個人

にとっての意義も持っている（加藤ほか、2003）。しかしながら現在ボランティアガイド自身への目的意識は薄れつつあり、多くの団体が来訪者のために設立されている。オリンピックボランティアは、自身と来訪者双方への目的意識があると考えられる。そこで本論文では、観光ボランティアガイドの現状や通常の観光ボランティアガイドとオリンピックでのボランティアガイドの共通点や差異をもとに、オリンピックボランティアがボランティア団体にどのように映るのか、開催地域の近隣地域への影響の与え方などを検証していく。一例として千葉県内のボランティア団体やサーフィンが行われる一宮町周辺地域にインタビューを行い検証する。

参考文献

・一般財団法人日本財団ボランティアサポートセンター（最終閲覧日：2018年10月18日）  
<https://www.volapapo.tokyo/index.html>。

・加藤麻里子ほか、『地域住民による観光ボランティアガイド活動の実態と動向に関する研究』、社団法人日本造園学会、2003年3月31日。

・公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会（最終閲覧日：2018年10月18日）  
<https://tokyo2020.org/jp/special/volunteer/>。

・財団法人日本余暇文化振興会、『旅のもてなしプロデューサー「技編」』、ぎょうせい、2008年5月15日。

---

発表者氏名：田上 紗帆

所属ゼミ：佐々木一恵ゼミ

タイトル：日本のフェアトレード市場規模拡大と人的販売との関連について

発表概要：

国連での合意で2016～2030年の世界長期目標となった「持続可能な開発目標(SDGs)」達成に向

け、「フェアトレード」という言葉を耳にする機会も増えている。フェアトレードとは、直訳すると「公平・公正な貿易」で、開発途上国からの原料や製品を適正な価格で継続的に購入することにより、正当な支払いを受けていない開発途上国の生産者や労働者の生活改善と自立を目指す貿易の仕組みのことである。従来の貿易と比べ生産者～消費者間の介在者（輸出・輸入業者など）が少なく、中間搾取を最小限に抑えられるため、生産者の取り分を増やすことができる。

1972年、国際協力 NGO「シャプラニール」の活動から日本でフェアトレードが始まった。1993年には国際基準を遵守した製品のラベル認証を行うトランスフェアジャパン（現在のフェアトレード・ラベル・ジャパン）が設立された。1980～2000年代に多くの開発 NGO や企業が活動を始めたが、日本のフェアトレードの認知度（貧困・環境問題と結びつけられる人の割合）は、「フェアトレードと倫理的消費に関する全国意識調査 2015」によると2015年時点で29.3%と、フェアトレード先進国イギリスの同年の認知度 85%から遅れをとっている。一方、日本国内のフェアトレード市場は年々拡大傾向にあり、認証製品の年間市場規模が2015年には100億円を突破、翌年には前年比13%増の113億円6千万円となっている。

本稿の目的は、日本でフェアトレードは認知度が低いにも関わらず、年々市場規模が拡大している点に着目し、消費者の傾向の変化とそれに対する企業の対応や戦略をもとに、その背景にあるものは何か検証することである。近年、情報技術の進歩に伴い、企業活動は市場シェア重視の「マーケット中心モデル」から、消費者各個人のシェア重視の「消費者中心モデル」へと変化してきている。以前は人々が共通して持つ好みを満足させることで市場シェア上昇を目指していたが、現在は消費者に密着し、一人一人のニーズを発見して個々の満足度上昇を目指している(田村、1997)。こうした動きの中で有効な販売方法に「人的販売」がある。特に

消費者のフェアトレード認知度が低い日本において、ショップでの製品購入には店員による接客が大きく影響することが考えられる。

以上から、本稿では資料分析とインタビュー調査に基づき、日本でフェアトレードは認知度が低いながらも年々市場規模が拡大している理由に、人的販売が消費者に与える影響があるのではないかという仮説を、複数のショップの事例を基に検証していく。

#### 参考文献

- ・田村泰彦、『インタラクティブ・マーケティング』、群馬大学社会情報学部研究論集第4巻、1997年。
- ・フェアトレード・ラベル・ジャパンホームページ <https://www.fairtrade-jp/org>（最終アクセス：2018年10月16日）。
- ・渡辺龍也、『フェアトレード学 私たちが創る新経済秩序』、新評論、2010年。

---

発表者氏名：中野凧沙

所属ゼミ：佐々木一恵ゼミ

タイトル：ソフト・パワーとしてのオリンピック—2020年東京が目指す姿

発表概要：

2020年東京オリンピックを目前に、サマータイム導入やボランティアなどいまだに多くの課題を抱える中、開閉会式でのパフォーマンスにも注目が集まっている。演出の総合統括には狂言師の野村萬斎氏が就任したほか、2016年のリオオリンピック閉会式での引き継ぎ式の演出チームであった広告クリエイターの佐々木宏氏、「ALWAYS 三丁目の夕日」「永遠の0」の映画監督の山崎貴氏らが製作に携わることが報道された(三須、2018)。

オリンピックは、「スポーツを通して心身を向上させ、さらには文化・国籍などさまざまな差異を超え、友情、連帯感、フェアプレーの精神をもって理解し合うことで、平和でよりよい世界の実現に貢

献する」という精神のもと行われる。開催都市及びその国はオリンピック憲章を遵守し、恒久的な平和を追求する意思を表明する。その意思はパフォーマンスにも反映され、内容は国際オリンピック委員会の承認を得た上で披露される。このことは世界で共有される価値観を持っていることを示唆しており、国際社会において自国の存在感を示すソフト・パワーとして作用する(ドネリー、2015)。

開閉会式でのパフォーマンスは、大会を盛り上げて人々の団結を促すだけに留まらない。開催都市「らしさ」を様々な方法で表現したり、その国を代表する有名スポーツ選手らが登場したりする傾向がある。オリンピックのような注目度の高い国際大会で発信するということは、世界中の人々がその国に対して何かしらのイメージを抱くということである。短いパフォーマンス時間の中に「らしさ」を凝縮させ、それが与えるイメージを計算する必要がある。開催都市の国民にとっても、曖昧に抱いていたその国「らしさ」という認識が象徴的にパフォーマンスとして表現されているのを見ることで、自国の魅力を再確認するのである(周、2012)。開催都市とその国が全責任を負って創出するパフォーマンスは、大会終了以降も外交政策や経済と大きく関わるソフト・パワーとして重要な役割を担っている。

上記のことを踏まえ、本論文ではオリンピックが持つソフト・パワーとしての役割から、日本がオリンピックでのパフォーマンスによって国際社会で何をしようとしているのかを分析する。2020年大会の分析にあたり、2016年リオオリンピックでの閉会式での東京によるプレゼンテーション、アジアにおける開催国である北京オリンピックの開会式でのパフォーマンスを検証していきたい。

#### 参考文献

・周星 (2012) 「北京オリンピック開会式と『イメージング・チャイナ』」、『文明 21』 29 巻、pp.81-106、愛知大学国際コミュニケーション学会

・ドネリー、ピーター (2015) 「権力、政治とオリンピック—2010年バンクーバー大会及び世の他の事例から」、『スポーツ社会学研究』 23 巻 2 号、pp.3-22、日本スポーツ社会学会

・三須一紀 (2018年7月30日) 「東京五輪の開閉会式演出、野村萬斎が総合統括に就任」日刊スポーツ (最終アクセス: 2018年10月15日)

<https://www.nikkansports.com/general/nikkan/news/201807300000023.html>

---

発表者氏名：阿部 洋介

所属ゼミ：佐々木 一恵ゼミ

タイトル：プロスポーツとエンターテインメントの境界線—NFL、プロレス、eスポーツの事例から—

発表概要：

スポーツとは、楽しみを求めたり、勝敗を競ったりする目的で行われる身体運動のことである。しかしながら、プロスポーツが健全な大衆娯楽として発展し、メディア価値をともなったビックビジネスとして規模を拡大するにつれ、競技者はファンが求めるものを提供しようと考え始めた。そして、今日では、野球やサッカーなどのプロスポーツは、収益を得ることが求められたことで、「見せるスポーツ」への動きが顕著になり始め、エンターテインメント化が進み続けている。その中で、特に、アメリカのスポーツ産業の中で最も成功したプロリーグであるNFLは、リーグが行うマネジメントシステムによって、「だれも勝敗の予想がつかない白熱した試合」を作り出し、勝ち負けは関係なく人々に興奮を与えている。さらには、ハーフタイムショーを行い、試合に付加価値をつけることによって、NFLに関心がない人にも惹きつけ、単なるスポーツイベントではなく、競技性を持った一つのエンターテインメントとしても成立させている。また、プロレスのように、試合に先立って、その内容や勝敗を決定し、競技性をなくし、スポーツからエンター

テイメントに変化したものもある。しかし、このようにスポーツのエンターテイメント化が進む一方で、娯楽だったものからスポーツに変化したものもある。それが、近年、アジア競技会のメダル種目になったことで注目されているeスポーツである。eスポーツとは、「エレクトロニック・スポーツ」の略称で、コンピューターゲーム上で行われる競技のことで、今日では、多額の賞金が獲得できる大会やプロリーグも発足されており、プロゲーマーとして活躍する人もいる。また、eスポーツは、「ゲームをする」という競技性だけでなく、「高いレベルのプレーを見る」というエンターテイメント的要素にも注目を集め、今後のビジネスの拡大が期待されている。

このように、現代のスポーツ界とエンターテイメントは密接につながっている。だからこそ、本論文では、NFL、プロレス、eスポーツの共通する部分や異なる部分を考えることで、プロスポーツとエンターテイメントの境界線を検証する。つまり、競技者の実力が勝敗に直接影響を及ぼすことを示す「競技性」と勝敗よりも観客を楽しませることを示す「興行性」に注目して、それぞれの競技のファンが求めているものを分析する。

#### 参考文献

・デジタル大辞泉(最終アクセス 2018年10月15日)

< <https://kotobank.jp/word/スポーツ-84860> >

・知恵蔵 mini (最終アクセス 2018年10月15日)

< <https://kotobank.jp/word/eスポーツ-192210> >

・杉本厚夫(1997)『スポーツファンの社会学』、P138、世界思想社

・マイケル・R・ボール(1993年)『プロレス社会学』、P55、同文館

発表者氏名：小川 礼乃

所属ゼミ：佐々木一恵ゼミ

タイトル：ジャパンプランド化した「日本らしさ」  
ー川越市の事例を通してー

発表概要：

近年、2020年の東京オリンピックというビッグイベントへ向けて観光業がいつそう盛り上がり、インバウンドという言葉を目にする事や、街で外国人観光客を見かけることが増えてきている。戦後の外貨獲得手段として重要な国策として位置づけられた観光事業は2000年代以降、国土交通省による「グローバル観光戦略」や「ビジットジャパンキャンペーン」などの観光立国化政策をはじめ、訪日外国人旅行者を倍増させる取り組みが行われてきた。その結果、日本政府観光局によると2017年では日本を訪れた外国人旅行者は7年前の4倍である2500万人へと増加した。

ところで外国人旅行者を魅了しているコンテンツとはどのようなものなのだろうか。最近では日本のクールな文化を発信しようと取り組まれた「クールジャパン」も話題になっている。実際、観光庁の消費動向調査によると主に日本食体験、自然景勝地、ショッピング、旅館宿泊、日本らしい文化体験が「日本に来て満足したこと」の上位にあり、「体験ツーリズム」という言葉が注目されているように「見る、知る」よりも「体験する」ことにニーズが高まっていると窺える。しかし、これらが持つ日本らしさは様々な文化が混在した「日本らしい」文化であり、またこの「日本らしい」文化は一つの商品のようにあらゆるところで出会うことができるのではないか、という疑問が挙げられる。

そこで本論文ではこの「日本らしい」コンテンツと合わせて、生産国が消費者に与える連想についての研究である「原産国イメージ効果」に着目する。この「原産国イメージ効果」は“Made in ○○”の記載が、消費者へ製品の選択に影響を与えると指摘されてきたが、「ブランド」概念が急成長すると、消費者にとって製品を選ぶ手掛かりとしての基準

がブランドへ移行した。(朴 2012) このことから、製品を選ぶ際に原産国よりもブランドが優位となる、「原産国イメージ効果」と「ブランド」の複合性に関するモノ消費のパラダイムのように、観光における食の体験、建造物、着物の体験などの「日本らしい」文化は様々な文化が混在した「日本らしい」コンテンツとして構築され、純粋な原産国ではなく「ジャパブランド」として消費されているのではないかと仮説を立て、検証する。

上記の観点から10年間で6倍もの外国人旅行者が倍増した非ゴールドルートである川越市を事例に、外国人向け観光パンフレット、観光サイト、実際に訪れた観光客のsnsの写真の3点から、観光客に求められる日本らしいコンテンツが「ジャパブランド」として消費されているのではないかとすることを資料分析する。

#### 参考文献

上原義子 「生産国情報に関する研究」『日本経営診断学会全国大会予稿集』日本経営診断学会、2008年。

朴 正沫『消費者行動の多国間分析 - 原産国イメージとブランド戦略』千倉書房、2012年。

農者に向けた制度や設備は充実している。実際に、近年新規就農者数は増加傾向にあり、2013年の16,020人から2016年には19,020人へと増加した。後述する今回聞き取り調査を行った農家においても2016年に新たな20代日本人男性労働者が雇用されている。さらに、日本人労働者を雇用するだけでなく、中には技能実習制度を利用し外国人出稼ぎ労働者を雇い、人手不足を解決している農家も存在する。

日本における技能実習生数は年々増加している。1993年に42,615人であった技能実習制度を利用した外国人入国者は、2016年には109,334人まで増加した。それは農業分野においても同様であり、2013年から2017年の間に2倍近く増加した。しかし農業分野の技能実習生は、工業やサービス業など他の業種と比べると3倍近く逃亡率が高い。理由として農業の特性に3K（汚い・きつい・給料低い）があることや、農家によっては技能実習生を奴隷のように酷使してしまう実態がある[上林2015]。さらに農業や水産業のような環境に作用される産業においては、本制度の本来の目的である技能移転はその意味をなさず、単純な労働力確保の制度となってしまっている現状もある。

本発表の目的は、新規就農者が取り組む日本人労働者獲得のための活動を明らかにし、増え続ける技能実習生と日本人労働者の新たな関係性を模索することにある。そのため、技能実習生を雇う農家が複数見られる千葉県富里市を一例とし、複数の農家へ聞き取り調査を行った。上記の調査より、富里市の農家では元々不法滞在外国人を雇用していた歴史があり、現在複数の農家が技能実習生を雇用していることに関係していることや、後継者のいなくなった農家が別の農家にとっても安価な価格で土地を貸すことで集約化が進み、作物の種類や必要労働力の変化など、変わり続ける農業経営の形が見られた。以上の内容を踏まえ、高齢化問題や担い手が減少し続ける農業と、増え続ける農業

発表者氏名：伊藤 啓太

所属ゼミ：佐々木一恵ゼミ

タイトル：新規農業従事者と技能実習生の新たな関係性—千葉県富里市の事例から—

発表概要：

現在、日本の農業が抱える問題点の一つとして、農業従事者の減少がある。1965年に比べ2015年には農業従事者人口は約1/6となった。さらに新規就農者数が農業リタイア者数に追いついていないため、今後ますます従事者人口は減っていく。このような問題があるが、新規就農者を支援する制度は新規就農者への資金付与制度である農業次世代人材投資資金や民間の農業学校など、新規就

分野の技能実習生との新しい「今」を記していきたい。

#### 【参考文献】

上林千恵子 『外国人労働者受け入れと日本社会一技能実習制度の展開とジレンマ』 東京大学出版会、2015年

山下一仁 「農業労働問題の本質は何か？」『週刊農林』、第2303号（2017-1-5掲載）

農林水産省『農林センサス』  
www.maff.go.jp/j/tokei/census/afc/（最終アクセス日 2018年10月17日）

発表者氏名：王 博

指導教員：大嶋良明

タイトル：Acfun、Bilibili 動画における弾幕言説分析のための予備的検討--Jieba による中文形態素解析にもとづいて

発表概要：

本稿では中国の動画共有サイトから採取した「弾幕」テキストを対象に中国語形態素解析に基づく分析の結果と検討内容を報告する。

弾幕とは、ニコニコ動画のコメント機能の通称であるが、筆者が研究対象とする中国の動画投稿サイトではサービス提供側が用いる公式な機能名称として浸透している。中国での弾幕は日本アニメや二次元系創作物を中心とした動画共有サイト Acfun において 2008 年に最初に導入され 2010 年にサービスを開始した類似のサイト Bilibili 動画において愛好者の間に普及した。弾幕機能の提供をきっかけに、Acfun と Bilibili 動画は急速に発展したのである。筆者の関心は、Acfun と Bilibili 動画の弾幕テキストの分析を通じてそのようなオンラインの言説の特性を明らかにすることである。

日本語や中国語のような単語境界が明示されない言語のテキストを大量に解析するときに必要な前提作業は、精度の良い形態素解析、すなわ

ち単語への分割と品詞分類である。本稿ではこれに Jieba(ジェバー)というツールを使用した。Jieba は、2013 年 6 月、Github (<https://github.com/fxsjy/jieba>) 上で公開された中国語形態素解析ツールである。

Jieba を構成する 3 つの主要要素技術は以下の通りである：

1. 接頭辞辞書構造による効率的な単語グラフスキャンニング(word graph scanning)

2. 動的計画法(Dynamic Programming)による探索

3. 隠れマルコフモデル(Hidden Markov Model)とビタビアルゴリズム

(Viterbi algorithm)による未知語の処理

Jieba は用途に応じて 3 種類の解析モードを持つ。フルモードは一つの中国語テキストにある単語を可能な限り色々な組み合わせで分割する。検索エンジンモードは検索エンジンの単語の分割方法を参考して設計されたモードである。そして精確モードでは中国語テキストの精度の良い分析に適した解析モードである。

このうち Jieba の解析モードについては、コーパスを用いた先行研究によると F-尺度(F-measure)を指標とする評価実験においてまずまずの性能が期待できることが報告されている。黄(2013)は北京大学のコーパスとマイクロソフトのコーパスを Jieba で解析し、F-尺度がそれぞれ 0.874 と 0.859 という実験結果を得た。また解(2017)は 2014 年の人民日報のタグ付きコーパスを用いて F-尺度が 0.815 であることを報告した。黄と解は Jieba を中国語形態素解析に使用可能なツールであると評価している。

以上の知見を踏まえて筆者は本稿では Jieba によるオンラインテキスト分析の予備的実験を行った。まず Acfun と Bilibili 動画の弾幕をもとに Bag of Words (BOW) を作成し、そこから出現頻度が高い単語を抽出した。これらの単語群から

Acfun と Bilibili 動画のユーザーの関心領域の特性が観察できると考えられる。さらに Acfun と Bilibili 動画の弾幕が持つ言説の特徴を分析することも可能だと考えられる。今回の発表においては現段階までに取得できた Acfun と Bilibili 動画の各ジャンルの弾幕の一部を分析した結果を報告する。

---

発表者氏名：湯 華晟

指導教員：大嶋 良明

タイトル：『ファミ通』アンケートから見る『Fate/Grand Order』というゲームの人気

発表概要：

『Fate/Grand Order』（フェイト・グランドオーダー）とは、ゲームブランド TYPE-MOON によるゲーム作品『Fate/stay night』を元として製作されるスマートフォン専用ロールプレイングゲームである。略称は『Fate/GO』もしくは『FGO』である。2017年、日本国内のモバイルゲーム課金売り上げランキングトップ10の中には、従来作品の知的財産（Intellectual Property、略称 IP）を利用して製作されたスマホゲームは全部で6つある。その中、『FGO』は2位に593億円（単位:JPY）の大差を付けている。このような結果になった原因としては、原作由来のファン層がゲーム自体の面白さを口コミで Twitter などの SNS 上に伝わって、新たなファンを獲得すると同時に大人気となった。本研究では『FGO』が如何してファンを獲得し、ここまでの人気を得たのかを考察する。

日本のスマホゲームの新規 IP 作品は 2012 年の『パズル&ドラゴンズ』と 2013 年の『モンスターストライク』以降、大ヒットする作品はない。そこで 2014 年から、高い認知度を利用したマーケティング展開が可能で、お馴染みの世界観、キャラクターが登場し、訴求が容易で、IP の原作ファンを取り込むことができる従来の IP を利用して製作されたスマホゲームは物凄い勢いで増加し、かなりの数になっている。『FGO』もその流れの中で生ま

れてきた。当初は単なるファンゲームだであったが、『FGO』の 2017 年日本国内課金売り上げは 896 億円で、日本国内モバイルゲーム売上ランキング上では『モンスターストライク』に続いて 2 位を占めている。またこのランキングから、人気の従来 IP 作品の数はすでに人気の新規 IP 作品を上回っていることも分かった。

研究方法としてはまず、公式サイトや大手ゲーム誌などが出したアンケートで『FGO』の人気に関わるキーワードを選出する。今回はファミ通が 2018 年 7 月 14～16 日に出した FGO のアンケートに着目し、一人のプレイヤーとしてその結果を分析した。そしてこの分析によって、『FGO』の特徴でもある 100 万字を超える大ボリュームのメインシナリオとキャラクターごとの個別シナリオ、つまりストーリーとキャラクターが主に人気を集中していることが分かった。それが原因で、遊び始めた時期が遅くでも、プレイヤーはゲームをやり込み、高レベルに達したことも分かった。これで『FGO』の面白いところを初歩的に考察ができた。そして今後は今回出した結果を基に Twitter 上のコメントなどを分析し、プレイヤーの視点から『FGO』がこのような成果を出した原因を考察する。

---

発表者氏名：趙学宇

指導教員：大嶋良明

タイトル：中国字幕組の著作権侵害をめぐる

発表概要：

本研究では「字幕組」をめぐる著作権関連の問題を検討する。また「版權時代」の字幕組の法的立場について考察する。

字幕組とは中国において様々なジャンルの海外映像作品を翻訳し字幕をつけてインターネットで提供する多数のアマチュア集団のことである。最初の字幕組は 2001 年頃から活動を始めたと言われるが、これはアニメ映画『もののけ姫』に字幕

をつけたものであった。中国では1978年の中国改革開放以来、海外映像コンテンツの受容が始まったが1980年代にはテレビ放送、1990年代中頃からは（海賊版を含む）映像媒体による国内流通、そして2000年代に入ってからインターネット配信というように3つの発展段階があったが、インターネットの普及と共に字幕組の活躍が活発化したと見られる。これは2006年から2011年までの間、中国国内において映像コンテンツの輸入が途絶えたこととも関係が深い。

2011年には海外作品の輸入が再開され、それ以後は、動画共有サイトは配信作品の著作権を取得するようになった。いわゆる「著作権時代」の到来である。このような中国社会の変化の中、取得した映像作品に無許可で字幕を付して流通させる字幕組の活動は次第に違法と見なされるようになり、数々の摘発事件が起こった。同時に字幕組の著作権をめぐる問題が注目されるようになっていく。

従来の研究では、字幕組は著作権の翻訳権、情報ネット伝播権、そして複製権を侵害したと解釈されており、法的には字幕組の活動内容には違法性が明白である。しかし経済的には小規模集団に過ぎない字幕組の活動の一つひとつを著作権侵害の事例としては取り上げないであろうとの解釈も存在した。

そこで本研究では文献調査を中心に字幕組に関する摘発事例と著作権侵害の内容を調査し、字幕組の法的立場を明らかにする。また中日両国での著作権侵害要因についても検討する。具体的には中日両国の著作権を参照することで字幕組の著作権侵害要因は4つに分類されることが明らかとなった。

---

発表者氏名：陳瑩瑩

指導教員：佐藤千登勢

タイトル：日本青春映画における青年像－『リリイ・シュシュのすべて』と『ユリイカ』を巡って－

発表概要：

本研究は、青少年の犯罪を描いた青春映画を対象にし、その中の青少年がどのように表象されているのかを考察するとともに彼らの人物像と心理を分析する。

研究背景：青春映画といえば、明るくて楽しい青春を謳歌する作品が多いが、暴力や犯罪など絶望的な青春を描いた作品もある。いじめ、詐欺、強盗、レイプ、殺人など非行や犯罪の要素が充満している。その中で、殺人が一番極端な行為である。日本青春映画の中に、青少年の殺人を扱った作品は70年代からもうすでに存在している。例えば、1974年に公開された寺山修司の『田園に死す』は、「母殺し」の願望を重要な主題として取り上げている作品である。そして、『田園に死す』の翌年に公開され、1974年に千葉県市原市で実際に起きた殺人事件を素材にしている長谷川和彦の『青春の殺人者』もまた、「親殺し」を主題とした映画である。

研究動機：2015年に内閣府が行った「少年非行に関する世論調査」によると、約8割の人が、少年非行は「増えている」と回答している。近年、少年犯罪事件が増え、凶悪化しているというのが社会一般の認識のようである。しかし、法務省の『犯罪白書』によると、2004年から12年連続で、刑法犯として検挙された少年の数は減少している。社会の認識と実態の間にずれが生まれるのは、おそらく、最近、マスコミやメディアなどの影響によって、少年犯罪事件が目立つようになったからではないかと思う。また、九十年代以降、続々と公開される少年犯罪をテーマとした映画も原因のひとつだと考えている。

分析作品：

青山真治『ユリイカ』（2000年）

岩井俊二『リリイ・シュシュのすべて』（2001年）



研究方法：映画を取り巻く幾つかの青少年問題を通じて、その中で少年少女たちがどのように描かれているのか、エリクソンの発達段階説などを援用しつつ彼らの人物像および心理を分析していく。

---

発表者氏名：屈 嘉偉

指導教員：大嶋 良明

タイトル：bilibili 動画におけるボーカロイド現象の研究—N 次創作の分析を中心として

発表概要：

ボーカロイドは日本で開発され動画投稿サイトで流行しているが、2011 年に中国語化されて中国でも流行の兆しを見せている。本稿では動画投稿サイト bilibili 動画への投稿を分析することにより中文ボーカロイド現象の N 次創作の特性を論じる。

本研究の先行研究は日本のボーカロイドに関する研究と中国の事例研究に分けられる。まず日本のボーカロイドに関する研究において濱崎ら(2010)はニコニコ動画上にあるボーカロイドの投稿について、作詞作曲、歌声の合成、イラストの作成など、多岐に渡る創作活動の引用が行われていると指摘した。また、濱野(2012)はニコニコ動画上のボーカロイドの N 次創作について、ユーザー同士が「コラボレーション的に作品を制作していく」という、創作のコミュニケーションが存在していると指摘した。

ボーカロイドに関する中国側の研究は、日本のボーカロイド現象をユーザーにより作成されたメディアの典型例として議論した。中国の事例研究において王泉ら(2015)は、中国に展開したボーカロイドは文化事業の政策の一環として、更なる発展を目指していると指摘した。しかしながら、新しい文化現象として bilibili 動画での中文ボーカロイド現象に関する研究は現在のところ見受けられない。

本稿では中文ボーカロイドの N 次創作に着目して分析した。ウェブクロウリングの手法を通じて bilibili 動画上にあるボーカロイドの投稿データを収集し、N 次創作投稿の時系列を含む引用関係の詳細分析を行った。分析の結果、bilibili 動画における中文ボーカロイドは N 次創作という創作の引用が多く行われていること、また中文ボーカロイドの N 次創作の投稿はほぼ 2 次創作であるが、最大 5 次創作まで創作の連鎖が存在していることなどが明らかになった。

---

発表者氏名：金花

指導教員：高柳俊男 教授

タイトル：中国朝鮮族グローバル移動と民族意識—聞き取り調査を通じて—

発表概要：

研究目的：中国朝鮮族は長期にわたる社会、歴史、政治、文化的影響により民族意識が形成すると思われるが、本研究は、中国政府の政治政策が中国を離れた中国朝鮮族の民族意識にどのような影響を及ぼしたかを解明することを目的とする。

研究背景：中国全国的調査—第六回人口調査(2010 年)によると、中国朝鮮族の人口は 183 万であり、主としては東北三省に分布している。そのうち吉林省延辺朝鮮族自治州には 79 万人が集住している。(2011 年統計、『延辺統計年鑑 2012 年』) 彼らは、長い時間に渡り、中国多民族社会を構成する一つの少数民族として自立している。しかし、朝鮮半島の朝鮮民族とは異質な中国朝鮮族の特徴を持って、中国公民として存在している。今日の少数民族政策は、少数民族に自治区を与え、区域内での自治を認めながら、その区域を中国不可分な一部として管理し、民族の分離権に至る自決権は強烈に否定している。このような自治権は、すべて国家の法律が優先である。したがって、論理的には地方はそれ自体が権利機関であるが、実際には限られた行政権力しかもってない。中央政府は国務院に

直接属する地方政府に対し、強い行政権力を持っている。つまり、地方政府は実際の権力は持ってないと考えられる。民族区域自治は共産党の指導という強い影響のもとでの自治であるため、政治的自治ではなく、民族の文化的自治である。先行研究ではこれらの法規は「丹念に検証することにあまり意味はない」（岡本 1999）と書いた。

研究方法：本章では、量的調査では得られない個人の具体的な情報を得るため、また政治を論じること自体が不安であるため、質的調査を行う。個人が生活の中で主観的な理解と感想を理解することで、その背後に隠された少数民族政策に分析できると思う。毎日の生活で、誇りては気づいてないが、話の中で現れる態度を分析することで、その後にある支配の構造をわかり、それが彼らのアイデンティティーにどのような影響を及ぼしたかを明らかにする。もちろん少数の人の事例を一般化することは難しいが、少なくとも中国朝鮮族の位置づけや社会経験が如実に表れていると思われる。

## B.ポスター

---

発表者氏名：柳川 実智

所属ゼミ：重定ゼミ

タイトル：コンピュータエンタテインメントの制作とプログラミングの学習—「難しい」は「面白い」へとどう繋がるのか—

発表概要：

ゼミの活動にてゼミ生が製作した作品を発表、解説します。

---

発表者氏名：長澤穂乃花

所属ゼミ：今泉裕美子ゼミ

タイトル：「地域」で生きるエコネット・美（ちゅら）—基地に頼らず命の自立

発表概要：

本報告では、ゼミ合宿で訪れた沖縄県名護市にあるエコツアーズグループ「エコネット・美」での経験から、遠く感じていた沖縄・辺野古基地建設問題に関心を持ったことをきっかけに、同グループが掲げる「基地に頼らず命の自立」とは何かを考察する。

エコネット・美は、沖縄本島北部名護市嘉陽でエコツアーを運営する。嘉陽は、辺野古とともに旧久志村 13 区の 1 区を構成し、名護市街から山を隔てた太平洋側東海岸の小集落である。住民の半数以上が高齢者の過疎地だが、ジュゴンやウミガメが訪れるサンゴ礁、イノシシ、アカショウビンを育む山に囲まれた、本島でも稀有とされる自然豊かな地域である。

エコネット・美では一年を通じ、地元住民の共有の浜で「じんぶん学校」が運営されている。「学校」といっても体験すべきことが順序立てて決められているわけではなく、何をするか、どう過ごすかは参加者自身に委ねられている。

つまり参加者は、「お客さん」として迎え入れられるのではなく、スタッフと共に働き、遊ぶ。食事は薪拾い、火起こしから始め、食材を採り、添加物を用いない素材を活かした味付けの料理を作る。シュノーケリング、浜遊びもした。シュノーケリングの際、曇り止めとしてゴーグルの内側にすりつぶしたハイビスカスの葉をこすりつけた。これらは「じんぶん」＝沖縄のことばで、自然を壊すことなく自然とともにこの地で暮らしてきた先人たちが、生活の中で得てきた知恵、である。

報告者には、基地反対運動が「守りたい」と主張する沖縄の自然をどこか遠く感じ、基地への抵抗は“過激”に見えていた。しかし辺野古で米軍基地建設現場を浜と大浦湾から見学し、エコネット・美を経験したことで、辺野古基地建設問題に対する抵抗に関心を持つようになった。その抵抗を、エコネット・美が掲げる 3 つの目的を通じた実践と思想から考察する。

1つ目は「地域おこし」で、過疎化した嘉陽で若者の雇用を生み出すことである。普天間米軍基地の辺野古沖移設の「見返り振興資金」に頼るのではなく、地元で根差した経済活動によって雇用を生むことを目的とする。

2つ目は「自然保護」で、自然をありのまま残すことではなく、必要な分だけ自然の恩恵を受けて生活することである。先人がどのように自然と共存してきたか、という「じんぶん」をもとに、現代の暮らしに合わせて自然を活用し、保護することを目指す。

3つ目は「基地に頼らず命の自立」で、上記2つを通じて実現されるものである。物質的豊かさに依存せず、生存の根を守り、生きていくための実践として、地元のおじやおばあちと一緒にエコネット・美の活動を行っているのである。

本報告では、エコネット・美が先人の知恵を現代の生活に適應させ、次の世代が継承しうる新たな「じんぶん」を生み出すことを通じて、辺野古に基地をつくらせない命の自立をどのように実現しようとしているのか、を明らかにしたい。

---

発表者氏名：佐竹航弥

所属ゼミ：衣笠ゼミ

タイトル：LGBT 側が敗訴した裁判の判例からみる日本における同性婚の可能性

発表概要：

私たちは、大阪府大阪市でのゼミ合宿のなかで実施したフィールドワークのひとつとして大阪人権博物館において人権にかかわる展示を鑑賞し、特に「性別にとらわれない生き方」というコーナーに強い印象を受けた。複数人のゼミ生が、大学2年時の留学先においてセクシャルマイノリティの人々に出会い、彼らが現地生活している様子に日本におけるそれとのギャップと疑問を感じたことが、今回の学会発表の原点となった。

法政大学には LGBT に関連する相談室や学内でサークル活動をする団体があり、当事者が快適に学生生活を送ることができるような取り組みがされている。しかし、いまだ当事者以外の人々の認識が低いことが問題点として挙げられる。

これまで私たちのゼミでは、さまざまな文化事象を批判的にみることで、現代社会のあり方とそれが抱える問題を深く理解するとともにそれに向き合う視座と判断力を身につけてきた。この問題に対しても同じような視点で研究に取り組みたい。

このことを踏まえて、私たちは学会発表のテーマとして次の2点を挙げたいと思う。

1. LGBT についての正しい知識を提供し、理解を深める

2. 批判的な視点を持つことで、新たな発見をもたらす

具体的な発表に向けてのプロセスは以下のとおりである。

まずテーマ1を達成するために、前提知識として日本における LGBT 人口や制度、用語説明などをポスターにまとめ、当事者からの意見を聞くためにインタビューも行った。これらの結果、海外に比べて日本は同性婚に対する法制度が整っていないということがわかった。

ここで私たちは、テーマ2のもと物事を批判的にみるという視点を持ち、欧米諸国の方が制度は整っているが、必ずしも同性愛者にとって住みやすい環境であるとは言えないという仮説を立てた。

そこで二つの判例を挙げ、仮説を検証する。一つはアメリカのコロラド州で起きた、同性カップルがあるケーキ屋にウェディングケーキを注文したところ、店側が宗教上の理由からそれを断ったという事例。もう一方は、イギリスの北アイルランドで、同性愛の活動家の男性が砂糖の飾りで「同性婚に支持を」と書かれたケーキを注文し、それをケーキ屋が同じく宗教上の理由で断った事例である。どちらの判例も店側が勝訴している。ここで注目

すべきは、LGBT に対する壁が宗教となっていることだ。

日本では無宗教の人口が多いため、あえてこれらの事例を日本に当てはめて考察しようという考えに至った。この考察をもとに、今後の日本における同性婚の未来を推察することをねらいとする。

発表者氏名：井野湧己

所属ゼミ：曾士才ゼミ

タイトル：変化するまなざし—SNS による観光行動とその弊害—

発表概要：

#### 【研究背景】

2018 年 8 月金沢でのゼミ合宿では、ゼミ生は観光中のどのシーンにおいても、カメラと SNS を稼働させていた。観光地でのこのような光景はいつから見られるようになったのか、素朴な疑問を持った。

#### 【研究目的】

本研究の目的は、メディアと観光の関係を考察し、特に新しいメディアである SNS が観光に与える影響を、その弊害も含めて明らかにすることである。

#### 【問い】

本研究の問いは、スマートフォンや SNS の普及によって、メディアが観光に与える影響、特にこれまであまり見られなかった弊害が生じているのではないかという問いであり、イギリスの社会学者・ジョン・アーリが唱える「観光のまなざし」がどのように変化しているのかを問うものである。

#### 【考察結果】

私たちが旅行や遊びに出かけるきっかけはメディアの情報であることが多い。そして、観光地では事前にその情報を得ていた「見るべき場所」や「実物」を確認しているのである。観光とは、いわば「場所の消費、イメージの消費行動」であり、メディアは「場所を何らかの形で脚色することで、場

所に対するイメージを構築する」のである（遠藤・寺岡・堀野 2014：p.4-18）。

ところで、観光に関わるメディアは、名所図会、絵葉書、ガイドブック、映画やテレビドラマなど時代とともに変化してきたが、あらたに登場した SNS は、「個人による情報の送受信」、「情報の送受信の容易性、即時性と拡散性」を特徴としている。このような特徴を持つ SNS の登場によって、見るべき場所が多様化しており、これを高山は「マスツーリズムから多様な細分化された目的に対応できる観光」へと変化したとしている（高山 2005：p.79-90）。

しかし、自撮り写真撮影による転落事故や空き巣犯が SNS を使って物色するなど、従来想起しなかった弊害が SNS によってもたらされている。本発表では、個人で情報を即時に送受信したいという現代人の欲求に起因する SNS と観光行動との関係についての考察結果を紹介したい。

#### 【参考資料】

遠藤英樹、寺岡伸悟、堀野正人編著『観光メディア論』ナカニシヤ出版、2014 年、p.4-18

ジョン・アーリ、ヨナス・ラースン『観光のまなざし』法政大学出版局、2014 年

高山啓子「社会現象としての観光—メディアによる観光イメージの構成—」『川村学園女子大学研究紀要』川村学園女子大学、第 16 巻 第 2 号 p.79-90、2005 年

#### 【参考サイト】

ALSOK「ゴールデンウィークの空き巣対策」2017 年、  
[https://www.alsok.co.jp/security\\_info/newsletter/201704.html](https://www.alsok.co.jp/security_info/newsletter/201704.html)

CNN.jp「自撮り写真撮影の死者、世界で 259 人 2011 年 以来 の 統 計 」 2018 年、  
<https://www.cnn.co.jp/world/35126543.html>

発表者氏名：畑山 武大

所属ゼミ：大嶋ゼミ

タイトル：「Pure Data・Arduino を用いた音響エフェクター製作と制御インターフェースの検討」

発表概要：

我々はメディアアートの研究や作品制作に取り組んでおり、ビジュアルプログラミング言語を用いての音楽、エフェクター製作、生体反応によるインタラクティブなメディアアートの考案、製作に興味関心がある。

我々は本学会で、ソフトウェアによる音響エフェクターと電子工作の可能性を検討する。今回はその活動の出発点として、プログラム言語 Pure Data で作成した音響エフェクターと6つのポテンションメーターを接続した Arduino によるコントロールサーフェスと組み合わせて全体を製作した。

プログラミング言語の Pure Data は、電子音楽の研究者 Miller Puckette が開発したビジュアルプログラミング言語である。GUI(グラフィカル・ユーザー・インターフェース)を用いてプログラムを作成するため、視覚的、直感的な音楽・映像製作が容易に行える。近年のパソコン上でのマルチメディア処理性能の向上にともなって、このようなソフトウェアによる音響製作の可能性が広がっている。プログラムを書き換えるのみで、同じデバイスの使用用途を変更することが可能となる。また既存の音響エフェクターには実装されない実験的な拡張性を備えた多様な音作りも魅力となっている。

また、近年マイコンによるモノづくりが盛んに行われている。以前は技術的な専門分野であったマイコンの世界が、Arduino や Raspberry Pi などが出現し、教育やホビー用途に適した開発環境が提供されて、誰もが手軽に実験や製作を行うことが可能となった。アイデアをすぐに形にするこの

ようなモノづくりは世界中で波及的に流行し、いわゆる Maker ムーブメントとなっている。

製作物の外枠にはアクリル板を材料とし TOROTEC 社のレーザーカッター Speedy100R を用いて切り出し、削り出し成形を行った。レーザーカッターはレーザーの照射密度(焦点)を調整することで様々な材料を加工できる。専用のドライバを組み込むことでパソコンからはプリンタとして扱うことができるため、Illustrator による描画を出力データとして利用する。これにより今回の製作物に施したような自由な表面のデザインや切抜きが可能となる。焦点位置や照射密度の調整を行うことでさらに複雑な表面加工ができるため、今後は面彫刻や溶込み深さにバリエーションを持たせるなど加工の種類を増やすことにも挑戦したい。

パソコンとマイコンの間は、Firmata と呼ばれるファームウェアを介して接続している。Arduino が読み取ったデータを Firmata がパソコンに伝えることで両者が連携する。

今回は数種類のエフェクターのプログラムを用意し、本製作物を1つのみ用いて様々な使い方を選ぶことを可能としている。同じデバイスであっても、プログラムを書き換えて利用できる点がソフトウェアによる実装の利点であり、これを一般化したハードウェアで生業できることが今回の製作の主張点である。

キーワード: Pure Data Arduino マイコン エフェクター MIDI

発表者氏名：大嶋 良明

所属ゼミ：大嶋ゼミ

タイトル：PureData によるミュージックシンセサイザーのモデリングの試み—実験的 FM 音源の実装をめぐる—

発表概要：

### 1.研究概要

本研究は Pure Data プログラミング環境において演奏可能なミュージックシンセサイザーを実現するものである。そのモデルとして 1980 年代にヤマハが開発した FM シンセサイザーの音源 IC について技術文献を参考に主要な機能の実装を通じて楽器としての特長と操作性を検討した。

### 2.研究の背景と課題の検討

われわれの研究室では、オープンソースのソフトウェアであるプログラミング環境 Pure Data とによる楽器、音響機器、メディアアートの制作を目指している。Pd はプログラムで音響や映像を作成することができ、特にメディアシステム構築とそのプロトタイピングに適している。とくにプログラム構造の視覚的表現が特徴で、直感的なプログラミング環境である。またネットワーク環境でのマルチプラットフォームな機器の相互運用なども可能である。

これまでわれわれは Pd 環境でのオルガンやリズムマシンなどの電子楽器や音響エフェクトの製作などを行ってきたが、これらの経験をもとに今回はあらたに FM シンセサイザーのオペレータ発音機構の実験的検証環境の実現に取り組んだ。

FM 音源方式はスタンフォード大学の John Chowning により提案された。これを発音源とするミュージックシンセサイザーは Yamaha により楽器として製品化され、その代表的機種である DX7 は 1980 年代の音楽製作の現場において世界的な人気を獲得した。音源 IC としての FM は楽器音源としての流行が去った 1990 年代以降はアーケードゲーム機や PC サウンドカード音源として変遷を遂げ最終的には携帯電話の着メロ生成機能にそ

の活路を求めた。その間の技術開発において正弦波以外の様々な音源波形が含まれるなど、その音源の機能と表現のバリエーションは独自の発展を遂げており今日的な電子音楽製作の観点からも興味は尽きない。ただし、これら新世代の音源 IC は楽器音源としては個別の電子部品として外販されておらず、音色開発を目的とする実験的なソフトウェア環境の構築には一定の価値があると考え

る。Pd ではプログラムによる各部機能の実装を通じて FM 音源の特長を理解し、FM シンセサイザーの設計思想についての直接の知見を得ることが可能となる。特に FM 音源の心臓部であるオペレータ機構は単純波形音源を複数個組み合わせることにより複雑な音色合成を実現することをその特徴とするが、Pd においてはスライダーやノブなど様々な制御オブジェクトによりこれらを自由に構成できることは発見的アプローチによる音源パラメータの新規開発や楽器としてのインタラクティブな操作性の検討にも適している。

### 3.研究内容とまとめ

Pd による各種 FM 音源のモデル化を検討した。特に実験的音色作りの操作面での観点から MIDI 信号や Arduino とフィジカルコントローラによる外部制御を製作した。

発表者氏名：増田 亜未

所属ゼミ：海外フィールドスクール (松本悟教授)

タイトル：少数民族の観光を考える—タイのエコミュージアムの試みから—

発表概要：

タイ北部では貧困層である少数民族と観光をめぐる、民族の文化や生活が観光の対象となり外部者によって「見せ物」にされることで生じる人権侵害が問題となっている。少数民族の人々は社会的・経済的立場が弱いいため、自ら観光対象になる選

択をしたとは言えない(宮本 2012)。そうした中で、2016年に少数民族の多いタイのターク県で住民主導の観光であるエコミュージアムという試みが始まった。

エコミュージアムは実体よりも関係性から定義される。すなわち、一定の領域を対象とし、地域全体を博物館と捉えて、住民主体で保全・管理を行うことを目指す(大原 1999)。貧困層が多い中国貴州省で少数民族とエコミュージアムを研究した曾(2016)は、自民族の文化資源を保護することと、それを観光振興につなげるの間には葛藤があることを示した。そこで、タイで新たにエコミュージアムが施行された村では、少数民族が主体的に文化を保護することと観光振興がどう折り合いをつけているのかを分析するため、「なぜエコミュージアムが導入され、どのように実施されているのか」を村での参与観察とインタビュー調査から明らかにした。結果は以下の通りである。

第1に、タイではカレン族に市民権が行き渡っていない状況があり、それゆえ彼らの生活は困難な状況にあった。カレン族の生活と文化を守るための方法として、住民主導を重視したエコミュージアムがタイに導入された。Pu Toe村では若者が村から出ていくことに対し村の文化継承ができなくなるという危機感があったため、村の発展と文化継承の手段としてエコミュージアムを取り入れた。

第2に、この村では村人自身が生活に重要な場所やものを選び、それらを体験、訪れることでカレン族の文化を理解し学ぶ観光コースを設定している。選ばれたものは全て、村人の信仰の場所やカレン族の食事、村の象徴的存在である象など生活に欠かせないものであった。村の有志が訪問者に対して、場所の説明や歴史を語りながら村を案内する。参与観察の結果、筆者らは観光名所を訪れたというよりはカレン族の文化を学んだという印象を強く持った。

この村のエコミュージアムは観光客を積極的に誘致しているというよりは、少数民族の文化を学びたいという人々を対象にしたものであり、文化保護と観光振興の間に葛藤は見られなかった。一方で、観光収入は多くないため、カレン族の文化に欠かせない象の飼育に必要な資金が不足しているというジレンマがみられた。

大原一興(1999)『エコミュージアムへの旅』鹿島出版会。

曾士才(2016)「中国貴州省における生態博物館の二〇年」塚田誠之編、『民族文化資源とポリティクス：中国南部地域の分析から』風響社 73-100。

宮本佳範(2012)「少数民族観光に関わる人権問題と観光倫理：タイ・ラオス・ベトナムの事例から」『東邦学誌』41(2),85-99。

国土交通省「公園に期待する役割」  
<http://www.mlit.go.jp/common/001115452.pdf>

参照日 2018年10月20日

株式会社ボーネルンド ~昔と今の公園に関する意識調査~ p1~2

<https://www.bornelund.co.jp/contents/uploads/sites/2/2017/04/d9d41f0cb72b4d470ee07db1f6a68c60.pdf>

参照日 2018年11月1日

発表者指名：辻晏己

所属ゼミ：甲ゼミ

タイトル：出会いの場としての公園

発表概要：

### 1.はじめに

経済的進歩を飛躍的に遂げてきた日本は、長寿、自由時間、生活水準の向上によって、余暇と娯楽に振り分けられる時間が増加している一方で、少子高齢化が激化し、日本には社会的触れ合いの必要性が一層高まっていることは確かである。しかし、ボール遊び禁止のプラカードから分かるように、社会的触れ合いは、時代変化と共に付与されていく社会的制限により薄れている。そこで私達が着目したのは、都市公園である。都市は年齢、収入、地位、宗教、人種的背景が違う集団の集合体である。これらすべての集団が、日常の仕事の傍らで直接出会えることは社会的触れ合いにつながるのではないかと我々は考えた。

そこで本研究は、都市部を対象として、ライフスタイルを決定する要因であると考えられる個人属性や都市住民が公園で重視する項目などに着目し、「出会いの場としての公園」を考察していくことを目的とする。

### 2.先行研究

株式会社ボーネルンド (2017) は、3～12歳の子供を長子に持つ 20～40代の親にインターネット上で公園の意識調査を行なった。結果、親世代の約7割が「昔より規制が増え、遊具が減った」と感じていることがわかった。また、公園で遊ぶ相手は誰かを調査したところ、昔に比べ「母親」「父親」ともにポイントが上昇しており、昔よりも公園が親子間コミュニケーションの場として盛んに利用されていることがわかった。一方「家族ではない異年齢の子ども」「家族ではない同年齢の子ども」ともにポイントが下降しており、公園で子どもが他の子どもと出会う機会が減少していることが理解できる。

3.研究方法 (今後何を実施して何を明らかにするか)

ゼミで学んだことを活かし、実施する調査の内容は公園ではなく人を中心に調査をしていくことにした。我々は都市に住む幅広い世代にそれぞれのライフスタイルについてインタビュー形式で調査をする。また、年齢問わず人が出会える場所提供の為、幅広い世代の人々のライフスタイルを調査して、彼らの生活の中で「理想的な快適な環境」とは何かを探っていく。それを元に現在の公園においての「重要度」と「満足度」を指数に表していく。

### 4.最後に

私たちは時代の変化と共に変化していく社会的触れ合いの機会の低下と用途の変化に着眼点を置き、ゼミの学びを活かし人の関わりに関する調査を深める。出会いに適した公園づくりのために、現在大都市に既存する公園を参考にし、情報を吟味した上で、私たちなりの公園をデザインし、最終段階としてその公園を不特定多数の人々に模型を通じて具体的な案を提供、説明できる用意をし、発表することによって、再び理想的な快適な環境を評価基準にして重要度と満足度の指数を出してもらおう。このデータを元に「出会いの場としての公園」を考察する。

#### <参考文献>

ヤン・ゲール(2016)『パブリックライフ学入門』鹿島出版会

ヤン・ゲール (2014)『人間の街：公共空間のデザイン』鹿島出版会

株式会社ボーネルンド ~昔と今の公園に関する意識調査~ p1~2

<https://www.bornelund.co.jp/contents/upload/s/sites/2/2017/04/d9d41f0cb72b4d470ee07db1f6a68c60.pdf>



参照日 2018 年 10 月 18 日

国土交通省「公園に期待する役割」

<http://www.mlit.go.jp/common/001115452.pdf>

f

参照日 2018 年 10 月 20 日

株式会社ボーネルンド ~昔と今の公園に関する意識調査~ p1~2

<https://www.bornelund.co.jp/contents/uploads/sites/2/2017/04/d9d41f0cb72b4d470ee07db1f6a68c60.pdf>

参照日 2018 年 11 月 1 日

<参考文献>

ヤン・ゲール(2016)『パブリックライフ学入門』鹿島出版会

ヤン・ゲール (2014)『人間の街：公共空間のデザイン』鹿島出版会

株式会社ボーネルンド ~昔と今の公園に関する意識調査~ p1~2

<https://www.bornelund.co.jp/contents/uploads/sites/2/2017/04/d9d41f0cb72b4d470ee07db1f6a68c60.pdf>

参照日 2018 年 10 月 18 日

国土交通省「公園に期待する役割」

<http://www.mlit.go.jp/common/001115452.pdf>

参照日 2018 年 10 月 20 日

株式会社ボーネルンド ~昔と今の公園に関する意識調査~ p1~2

<https://www.bornelund.co.jp/contents/uploads/sites/2/2017/04/d9d41f0cb72b4d470ee07db1f6a68c60.pdf>

参照日 2018 年 11 月 1 日

発表者氏名：羽鳥大我

所属ゼミ：岡村民夫ゼミ

タイトル：『となりのトトロ』の表彰文化論

発表概要：

「生きている価値のある人間はいるのか」これはとある小説の中の一説である。現実的ではないが、もし自然に存在する人間以外の生命が言葉を発せることができるのならば、このような問いを考えるのではないか。『となりのトトロ』は我々にその美しい自然描写によって、人間の壊されてしまった自然に対する向き合い方を提示しており、われわれ人間にこのような問いを自然に抱かせると考える。

『となりのトトロ』は『風の谷のナウシカ』（1984）、『天空の城ラピュタ』（1986）について1988年に公開されたジブリ映画である。宮崎駿監督（以下宮崎とする）はこの三作品を通して自然と人間の対立・矛盾という問題意識に取り組み、その約10年後の1997年にはその終着点であるかのように『もののけ姫』を製作した。今回はその中でも『となりのトトロ』を取り上げ、作中の自然描写に宮崎が込めたメッセージを読み解き、またその自然と人間との境界を明らかにしていく。

『となりのトトロ』における作中の時代設定は劇場パンフレットによると昭和30年代の初めである。宮崎は同パンフレット内で「つい最近まで『日本が誇れるものは？』との問いに大人も子供も『自然と四季の美しさ』と答えていたのに、今は誰も口にしなくなりました。（中略）忘れていたもの気づかなかったものなくしてしまったと思い込んでいたものでも、それは今もあるのだと信じて『となりのトトロ』を心底作りたと思っています。」とコメントしている。つまり宮崎は、昭和30年代の初めという、戦後間もない復興事業および1964年の東京オリンピックに向けてのインフラ整備最中の日本を舞台にすることで、失われていった日本の

自然美をトトロやネコバス、ススワタリなどの不思議な生き物とともに宮崎の理想像として表象し、「まだこういう風景は存在しているのだ、忘れてはいけない」と表象していると考えられる。また宮崎はトトロの棲む塚森を照葉樹林とすることで、人の手が加わっていない鬱蒼として暗澹たる原生林、どこか不気味な空間を生み出した。ここにはサツキとメイらが住む里山、即ち人の手が加わっている自然との対比を示しており、そういった中で宮崎は人間の原生林征服という大罪をも描写している。

青木研二（以下青木とする）は『『となりのトトロ』：その幻想性と構造』という論文内で、前段で上げた原生林と里山には一種の境界があると論じており、この境界を分けるファクターとして様々な不思議な生き物及び、作中に何度か登場する地蔵などを例に挙げている。青木は自身の論文内でその境界の先にある世界を「異界」とし、そこは非常に死に近い世界であると述べている。

我々は今回ポスター掲示によって、以上のような自然描写であったり、そこに生まれる人間界と異界の境界であったりを明らかにすることによって、そこに込められた宮崎の自然観や現代に送るメッセージなどを考えていきたいと考える。

---

発表者氏名：田中苑子

所属ゼミ：中島ゼミ

タイトル：スマトラゾウと人間の衝突——共生への道を探る

発表概要：

インドネシア・スマトラ島はかつて、豊かな熱帯雨林に覆われていて、スマトラトラ、ゾウ、オラウータンなどの大型哺乳類が多数生息していた。スマトラ島では、近年、森林伐採やアブラヤシ開発などにより、過去 30 年間で半分以上の森林が失われた。森林減少は生物多様性消滅の危機を引き起こす。森林が破壊されたことによって、餌を求めてゾ

ウは人里に現れてアブラヤシ農園を荒らし、家を壊す、農作物を荒らすなどの問題が発生している。村人は、彼らの家や農作物をゾウから守るために、毒殺や罠などで殺してしまう。

我々中島ゼミは、昨年のおらんウータンエコツアーに続き、東南アジアの中で最も豊かな熱帯雨林の一つであるグヌルス国立公園の北スマトラ州タンガハンでスマトラゾウのエコツアーに参加した。この経験を通じて、スマトラゾウと人間の衝突と、その解決策を考察した。

以前タンガハンには違法伐採が横行していたが、人々が違法伐採による損害を認識したことにより野生のゾウを使ったエコツアーの村へと生まれ変わった。ゾウは、エコツーリズムの人気者として地域コミュニティの生計を増やし、間接的に違法伐採から守るという働きをする。以前は違法伐採を行っていた村人も、エコツーリズムが生み出す大きな利益に魅了され、多くの元違法伐採者はエコツアーに関連する職に就き、タンガハン地域密着型のエコツーリズムの模範的な場所になった。エコツーリズムを支えるゾウは良い待遇を得ており、エコツーリズムを通じてゾウと人間の共生を実現させているのである。

しかし、エコツーリズムは良い影響だけを及ぼすわけではない。昨年と今年、ブキットラワンのオラウータンエコツアーに参加した。1960年代にオラウータン保護の重要性が国際的に問われるようになり、1973年にオラウータンのリハビリテーションセンターがブキットラワンに開設された。半野生のオラウータンを近距離で観察できる場所として知られるようになり、多数の国内外観光客が訪れるようになり、ブキットラワンは観光地として急速に発展したが人間の食べ物による栄養の偏り、人間との接触が引き起こす病気の感染などの問題が起きている。動物をさらに絶滅の危機に追い詰める可能性もあるため、エコツーリズムの在り方は慎重に考えられる必要がある。

衝突を抑制するためには森林破壊を止めることが重要である。彼らの棲みかを奪っている森林破壊は、実は私たちの日常に密接に関係している。森林を伐採し開発されたプランテーションで生産された紙やパーム油は、日本を含む世界中に輸出され、消費されている。インドネシアの自然環境に多大な負担をかけた商品を購入することによって、私たち消費者も知らず知らずのうちに環境破壊に加担しているのである。持続可能な商品を選択することによって、絶滅の危機に瀕しているスマトラ島の野生動物を守ることが出来るのである。

---

発表者氏名：本橋陽介

所属ゼミ：佐々木一恵ゼミ

タイトル：明治維新 150 周年から見る地域振興と歴史の消費（仮）

発表概要：

2018 年は、日本が近代化へと踏み出す転機となった明治維新から 150 周年目を迎える大きな節目の年である。日本政府は、「明治以降の歩みを次世代に遺す」こと、そして「明治の精神に学び、更に飛躍する国へ」向かうことを目標に、記念式典や記念事業といった多種多様な取り組みに力を入れている。加えて、地方自治体や民間団体による独自のイベントも全国各地で行われている。

明治維新 150 周年記念行事を分析するにあたり、まず 50 年前の明治維新 100 周年に目を向けてみた。明治維新 100 周年では約一万人が集まった記念式典に代表されるように様々なイベントが行われていた。これらの目的は「この 100 年の経験と教訓を現代に活かし、国際的視野に立って新世紀への歩みを確固としたものにする決意を明らかにする」ということであり、それぞれの時代で政府の目的に類似点がある。しかしながら、そのような政府主導による明治維新の称揚は、大衆に受け入れられる一方で「戦後歴史会」による大きな反対運動を引き起こすものだった(宮本,2018)。彼らは「明

治百年祭」が恣意的に歴史の一部を褒め称えていると同時に、かつて人々の精神を「ファシズムと侵略戦争」へと向ける役割を担ったとする紀元前 2600 年祭と同質のものであるとして警鐘を鳴らしたのである(宮本,2018)。このことから、明治維新 100 周年は過去の業績を思い返すだけでなく、問い直す機会でもあったと捉えられるだろう。

一方、明治維新 150 周年のイベントでは、各地方自治体がそれぞれの歴史的な出来事や人物を独自にアピールする傾向が見られる。例えば会津では戊辰戦争で正義を貫いた会津の人々の功績を、鹿児島では薩摩藩が近代国家形成の原動力の一端を担ったことを称えるイベントが行われている。同じ明治維新という歴史的事実を扱っているが、その地域にしかないオリジナリティを活かすことで観光資源として利用していると考えられる。

公益財団法人日本交通公社によると、「現在は『見る』だけでなく、『体験する』ことにも観光活動の範囲が広がっている。背景にある歴史や生活文化等の『知性』的側面へと興味関心が広がってきた」とされ、観光活動が多様化し、明治維新という 1 つの歴史的事実で終わらせるのではなく、歴史的事実が各地域のオリジナリティを含んだ観光資源として消費されているのではないか。

そこで本発表では、都市近郊へのインタビューをもとに、明治維新という歴史的事象の観光資源化を探る。加えて、幕末の英雄を多く排出する鹿児島や戊辰の記憶の残る会津若松など地方の明治維新 150 周年事業をヒアリングすることで、地域活性化と関連した「維新・戊辰史跡巡礼ブーム」が日本全国で起こっていることを示す。

以上の調査と資料分析から、明治維新という歴史的事実を地域の特色として観光資源化し、アイデンティティ創出の一助とする歴史消費傾向の実態を明らかにする。(1174 文字)

## C.映像

発表者氏名：太田 陽久

所属ゼミ：鈴木靖ゼミ

タイトル：韓国のヒロシマ・ハプチョンからの想  
い～日韓間で揺れた在韓被爆者～

発表概要：

毎年、第二次世界大戦の原子爆弾による死没者を弔い、世界の平和を祈る「平和記念式典」が行われる広島市平和記念公園。原爆ドームや平和記念資料館など、原爆の被害の凄惨さを訴える建造物が数多くあります。その平和記念資料館から歩いて10分も経たないところに、韓国人原爆犠牲者慰霊碑は建っています。私たちは原爆の恐ろしさを歴史の授業で教えられて知識として知っています。しかし、被爆者の10人に1人が朝鮮人であったことをご存知でしょうか？そして彼らは日本人であったという事実と、朝鮮人である事の狭間で長い間戦ってきたことをご存知でしょうか？

今回私たちはその中で在韓被爆者の方々に注目し、彼らを通して、一人でも多くの人にこの事実を知ってほしいとの思いから映像制作に取り組みました。

アメリカは1945年8月6日広島、8月9日長崎に、人類史上初の核兵器、原爆を投下しました。韓国原爆被害者援護協会が1972年に示した推計によれば、原爆投下時、広島市、長崎市合わせて7万人もの朝鮮人が被爆し、この中の4万人が爆死したといえます。

そして8月15日、日本のポツダム宣言受諾による無条件降伏で、朝鮮は36年に及ぶ植民地支配から解放されましたが、同時に在韓被爆者にとっての苦難の日々が始まりました。原爆から生き延びた朝鮮人約3万名のうち約2万3千名が、被爆した体で朝鮮半島へ帰っていきましたが、彼らには土地も財産もなく、どん底の生活を送ってしま

た。1950年に朝鮮戦争が勃発。韓国で在韓被爆者の存在は忘れられてしまいました。

日本では原水爆禁止運動の盛り上がりから、1957年「原子爆弾被爆者の医療等に関する法律」が制定され、原爆被害者であることが認定されると「被爆者健康手帳」が交付され、国費負担で治療が受けられるようになりました。

この被爆者健康手帳を受け取り、日本の被爆者と同じように補償を受けることが出来る

ように、在韓被爆者は韓国原爆被害者協会を設立し、これまで戦ってきました。そして現在韓国のハプチョンに原爆福祉会館を建設し、この事実を後世に伝えるために活動してらっしゃいます。

同じ場所で生活し、同じ場所で被爆したのにも関わらず、支援の手が届いていない人たちがいました。同じ時、同じ場所で生活していたのにも関わらず、所属する国や民族が違う事が、この差に繋がってはいけないと私たちは考えました。

戦後70年が経過し、戦争を経験した方が少なくなる中、この事実を伝えていけるのは、これからの未来を担う私たちです。

さらなる国際化の進展が予想される時代を生きる私たちには、同情や思いやりだけでなく、相手の立場に深い理解と共感をし、その時自分ならどうするかを考える「共感力」こそが必要なのではないでしょうか？

日韓には今でも複雑な問題が残っていますが、この映像がみなさんにとって、日本と韓国両国の関係、ひいては国際関係について考え直す契機となることを願っています。

発表者氏名：吉野そめい

所属ゼミ：島田ゼミ

タイトル：壁

発表概要：

1 建物の外周の部分。また、部屋などを仕切るもの。

2 前進を阻むもの。進展の妨げとなるもの。障害。

3 登山用語で、直立する岩壁。

上記は「壁」という言葉の定義である。「壁」が含まれている言葉は約 140 ほどあるという。その中から比喻・概念としての「壁」に今回注目する。

「壁」は実際の建造物としての壁だけでなく、「言語の壁」や「障壁」、「壁に突き当たる（困難なもの）が立ちはだかっている様）」など、実際には壁として目に見えているわけではない場合がある。この「見えない『壁』」の映像化に、1 組の男女の出会いから別れまでの物語を通じて挑戦する。

#### 構成

第一部 心の壁「狙う男と女」

第二部 城壁「一線」

第三部 地獄は壁一重「壁」

---

発表者氏名：山口 紘一郎

所属ゼミ：島田ゼミ

タイトル：Hiphop Hannyashingyo

発表概要：

般若心経は写経、読経などを通じて、広く親しまれているお経

であり、その教えはわずか 266 文字で構成されているにもかかわらず現在の人々にも響く深い内容を含んだ哲学的な教えが凝縮されている。しかし、現状として般若心経は漢文の日本語読みしかなく、ほとんどの人がその意味を理解していないということが事実である。私たちはこの点に着目して、どのようにしたらより多くの人に般若心経の魅力伝えることができるか考えた。最近、島田雅彦による超訳がなされ、平本正宏のポップな楽曲もつけられた般若心経。これにビートを加味し、ヒップホップダンスを組み合わせたら、写経や読

経と同じ効果が得られるのではないかと考え、実践してみた。ではなぜヒップホップダンスを組み合わせることにしたのか。近年、ヒップホップ文化が日本でも盛り上がりを見せている中で、その影響力には期待ができると考えたことが一つ理由である。また、写経ではお経を写すという行為、読経ではお経を読むという行為が、私たちのお経で踊るという行為と相似しており、写経、読経と同じ効果を現代風にアレンジして実践することができると考えたからである。

今回私たちが踊るダンスはオールドスクールヒップホップと呼ばれる 1970~80 年代にかけてアメリカで生まれたジャンルの中から LOCK ダンスと POP ダンスを選んだ。この二つは誕生した年代が同じということもあり音楽の親和性も高いため、完成度の高い作品が期待出来る。また、音楽の他に現代語訳された般若心経の歌詞と楽曲の雰囲気合うシーンをダンスと入り交じりながら編集した。このシーンでダンスをより際立たせたいという考えである。

この映像作品を通じて、般若心経がより身近な者として感じていただければ幸いである。

---

#### D. インスタレーション

発表者氏名：大瀧愛莉

所属ゼミ：森村・川村ゼミ

タイトル：『Me—わたしの知らないわたし—』

発表概要：

##### 【インスタレーション概要】

夢に登場するイメージ、言い間違え、沈黙、思いがけずやってくるこれらはどこから来たのか。「わたし」でない「わたし」がいるというのか。それならば、その「わたし」を呼び出してみようではないか。2018 年度の森村・川村ゼミは、こころの奥に

眠る「無意識のヴィジュアル化」をテーマにインスタレーションを行う。

実際の展示空間には、無意識と意識を設計する。抑圧されて意識に辿り着けない欲望、ヴェールに覆われた「出会いそこなう」男女、自我の幻想、混沌と広がるシニフィアン、倒錯と分裂した自我、などを作品化する。このように、無意識と意識の関係をヴィジュアル化することで、来場者は自分の意外な一面を垣間見ることになるだろう。

### 【コンセプト】

家族や友人、恋人のことをつい分かった気になってしまうことはないだろうか。思い通りにならないと、苛立ち、憤りを覚えてしまう。しかし、本当に相手のことを分かりきることなどできるのだろうか。ましてや「わたし」自身のことすら分からないのに…。

デカルトの「我思う故に我在り」という有名な言葉があるが、ラカンはこのデカルト的主体を批判している。そしてフロイトの唱えた無意識の存在に注目をした。そう、無意識こそが主体であると考えたのだ。それは、例えば「言い間違い」等に現れる主体である。自分の意図とは反した思いがけない言葉を発してしまった経験は誰しもあるだろう。ラカンに言わせれば、それはあなたが語ったのではなく、「無意識」が語ったのである。

この「無意識」というのは言語のように構造化されており、受動的に登録され、書き込まれてしまう。つまり、シニフィアンの連鎖が記録し続けている。そしてそれは、自分の意識とは異なる場所で行われている。我々は、無意識を操ることはできない。無意識に押し込められた欲望や聞はいずれ回帰し、我々を支配し続ける。

『あなたの目に見えるものがすべてではない。あなたの心には、未知の世界が広がっている。それはまるで、いまだ解明されない深海の世界のように…。』

本作品を通して、自分自身の知らない「無意識の世界」を覗いてみてはどうだろうか。普段見ている世界がいかに儂くもろいことに気が付くだろう。

---

発表者氏名：神山千尋

所属ゼミ：岩川ゼミ

タイトル：承認のディストピア

発表概要：

岩川ゼミでは一年間のテーマとして『自分をかたちづくるもの、社会をかたちづくるもの』を掲げ、春学期は主に映像作品の表象分析に取り組んできた。その中で登場したのが現代社会に深く入り込んだ SNS という存在と、アイデンティティを構成する要素である承認欲求であった。現代において SNS と承認欲求という言葉は一緒に語られることが多い。また、それはしばしば悪い意味を含む。しかし、本当に悪いことなのだろうか。そもそも承認欲求とは、他人から認められたいという欲求や自分が周囲から一目置かれるような存在でありたいという願望の総称であり、人々は承認されることで自己価値を認められる、自分は生きるに値すると感じることができるのである。つまり、承認欲求とは誰もが持つ当然の欲求だといえる。

一方、SNS はいつどのような形で生まれたのか。諸説あるが、私達が慣れ親しんでいる SNS が最初に生まれたのは 2002 年である。その後、SNS 上で構築された知人関係を活用するサービスが急速に成長した。あらゆる情報が公開され、全世界からアクセス可能であることが前提であった web において、プライベートな情報共有を手軽に実現できる SNS は一般のユーザに広く支持され、発展していった。

高橋(2014)はこう指摘する。「本来は、自分自身と、身近にいる家族や友人などの大切な人が、彼らを肯定できればそれで済んだ。ところが、彼らは不特定多数に認められることを求めるようになってしまったのだ。」「そこに SNS という自己表現の場が誕生し、一人一端末が行き渡るようになった。」つまり、SNS と承認欲求というものは、別々の道で発展してきたが、その要素が融合し、悪のイメージを生み出したのだ。しかし、SNS のユーザはそのネガティブな側面を知らずに利用している。さらに、最近では SNS 利用に対する義務感を感じる人もいるだろう。実際、情報を見逃してしまうことへの恐怖、『Fear of Missing Out(FOMO)』という考えが 2011 年頃から米国で浸透している。それに対して出てきたのが『Joy of Missing Out(JOMO)』、つまり情報が溢れる現代において、SNS や web と適度な距離を保ち、自分にとって何が大事なのかを見つめなおし、生活に充実感を取り戻そうとする動きである。

今回の展示で私達は SNS と承認欲求が合わさって生まれたネガティブさを『承認のディストピア』とした。人間の自然な欲求である承認欲求と娯楽として生まれた SNS が合わさり、結果として様々な問題を生んでしまった。そこで私達は SNS、web という目に見えない闇を空間として表現した。メインのオブジェとして存在するのが『侵食』である。SNS 上の煌びやかなアピールによって、自分自身が侵食され自己嫌悪に陥ることを可視化し、生身の人間にアートを施した。その他に、他の展示物と音でネガティブさを空間全体で表現した。私達は、展示を見に来た人が空間に入ることによって SNS そのものを体感し、外に出るという体験を通じて、『JOMO』の考えを提唱、過度の SNS 依存に対して警鐘を鳴らしたい。(1199 文字)

#### 引用文献・参考文献

・伊藤一徳(2013)『もしかしてあなたはフェイスブック依存症？そうならないための 5 つの対策－米国では“FOMO”が深刻な問題に』

<<https://trendy.nikkeibp.co.jp/article/pickup/20130823/1051646/?ST=trnmobile&P=3>>

・大向一輝(2015)『SNS の歴史』

<[https://www.jstage.jst.go.jp/article/bplus/9/2/9\\_70/\\_pdf](https://www.jstage.jst.go.jp/article/bplus/9/2/9_70/_pdf)>

・勢古浩爾(2011)『人に認められなくてもいい：不安な時代の承認論』PHP 研究所

・高橋暁子(2014)『ソーシャルメディア中毒：つながりに溺れる人たち』幻冬舎

・正木大貴『承認欲求についての心理学的考察－現代の若者と SNS との関連から－』

<[http://repo.kyoto-wu.ac.jp/dspace/bitstream/11173/2640/1/0140\\_012\\_002.pdf](http://repo.kyoto-wu.ac.jp/dspace/bitstream/11173/2640/1/0140_012_002.pdf)>

・村山昇(2016)『米国のバズワード「FoMo」と「JoMo」が意味することは？』

<<https://globis.jp/article/4774>>

・山竹伸二(2011)『「認められたい」の正体：承認不安の時代』講談社

---

発表者氏名：菅野優衣

所属ゼミ：熊田ゼミ

発表タイトル：あなたに問う「桃太郎」－めでたし、めでたし？－

発表概要：

桐谷・熊田ゼミは、「多文化共生社会」をキーワードにインスタレーションを発表します。

私たちは、人それぞれ異なった個性、文化を持った他者と交流しながら生きています。その中で、相手に対して、自分が持っていてしまっている「オリエンタリズム」による決めつけを押し付けてはいないでしょうか。私たちが今、そしてこれから生きる世界では、「オリエンタリズム」を発動せず、異なる

文化背景を持った人々と互いに認め合い、相互理解を通じた新たな文化の創造が求められます。

今回私たちは、ある物語から着想を得ました。「桃太郎」です。

どんぶらこ～どんぶらこ、桃から生まれた桃太郎は、おじいさんとおばあさんに大切に育てられ、やがて鬼退治へ出かける。猿、犬、キジを仲間に、鬼ヶ島へ。桃太郎たちは力を合わせて鬼を退治し、おじいさん、おばあさんと仲良く暮らしていきましたとき。めでたし、めでたし……

しかし、“めでたし、めでたし”でしょうか？

桃太郎にとってはそうであっても、鬼たちはどうでしょうか？

このインスタレーションでは、来場者に桃太郎のストーリー、または鬼のストーリーのどちらかを見てもらいます。そして、こっちだけが正しいという決めつけを省みたいと思います。

あなたの生活、そこから生まれる"あなたたちの文化"を持つ時、一見全く異なる文化を持つように見える者と、どのように接しますか？どのようにすれば共に生きていけるとおもいますか？

桃太郎と鬼の世界だけでなく、現代を生きる私たちの世界をも考えるきっかけになる作品を提供します。

---

発表者氏名：杉浦亜門

所属ゼミ：佐藤好彦・稲垣立男

タイトル：千 new 間

発表概要：

表象文化演習「コミュニケーションとアート」佐藤・稲垣ゼミによるインスタレーション作品。

なぜカレーは横長で少し浅めの皿に盛られるのであろう。

別にパフェグラスに盛っても華やかでいいのではないか。湯呑で飲んでも美味しいのではないか。

私たちの先入観への問いはここから始まった。

「先入観から脱する為、全てのものを一旦疑うべきだ。」とフランスの哲学者デカルトは主張した。

先入観は、前もって与えられている固定的観念であり、それによって人は自由な思考、コミュニケーションを妨げられる、というネガティブな認識が一般的である。例えば、カナダ人だから英語話者であろうと英語で声をかけると、英語は話せず日本語で返されて恥をかくというようなことである。カレーは横長で少し浅めの皿に盛る、というのも先入観の例で、パフェグラスや湯呑に盛るような自由な発想を妨げているといえる。

しかし、「先入観はネガティブだ。」というイメージも先入観ではないだろうか。

先入観がないならば、何語話者が疑い、相手が何語を話すか確認するまで声をかけることはできない。そしてカレーを食べる度に家にある全ての容器を頭の中で思い浮かべなくてはいけない。予めの知識や理解である先入観は、人が判断や行動する上で、ある程度の予測を決め、安心させてくれるというポジティブな役割も持っているといえる。

「先入観はネガティブだ。」という先入観は私たちの先入観に対する自由な思考、コミュニケーションを妨げている。

このままだと堂々巡りに陥るだろう。しかし、インターネットの普及によって加速された情報化の影響により、前知識なく未知のものに出会うことが少なくなった現代では、先入観そのものを考え直す必要があると私たちは考えた。そこであえて「『先入観はネガティブだ。』という先入観はネガティブだ。」と仮定し、より多角的に先入観を見つめ直した。

今回私たちは、多くの新しいものと人との間にある「先入観」をテーマとしたインスタレーション作品を提案する。この空間表現の中で、一人一人が



先入観そのものをネガティブ、ポジティブにとらわれずに、面白さ、美しさ、もどかしさ、くだらなさ等を感じて反応するという、先入観に対する自由な思考、コミュニケーションを自ら体現して頂きたい。

本作品に参加することが先入観を考えるきっかけとなることを期待する。

発表者氏名：佐藤真莉

所属ゼミ：甲ゼミ

タイトル：芸術を疑え～言葉にできない体験とは～

発表概要：

はじめに、「私たちが感じている芸術は本当に芸術なのだろうか」という問いを投げかけたい。

『触って楽しむ博物館』という書籍をゼミで取り扱い、視覚に頼らない作品を展示する博物館・美術館の存在を知った。そこから、どれほど自分たちが視覚に頼り、自分たちの得意な視覚の分野に固執し、執着しているのかという疑問が生まれた。その疑問から、どのような現状かをアンケートから調査したところ、28人中14人と半数が芸術との接点を美術館に持つということが分かった。

果たして、美術館に行き絵画を見ること歴史や背景、解説をすることは芸術体験をしていると言えるのだろうか。言葉では表せない、人には伝えられないような体験こそがその人にとっての芸術体験なのではないだろうか。このような疑問から、絵画を鑑賞し、終わってしまうのにとどまっているだけでいいのだろうかという考えに至った。

また、美術館で絵画を見る体験は受動的なのではないかという疑問も生まれた。絵画を見に行くという行為自体は能動的だが、見ているだけでは能動的といえるのだろうか、私たちは絵画に何を働きかけているのだろうか。では、能動的な美的芸術体験があってもいいのではないだろうか。

現在の芸術では、絵画が視覚、音楽が聴覚、料理が味覚・視覚・嗅覚に主に依存している。また、五感の中で視覚はアイマスク、聴覚はヘッドホン、嗅覚は鼻栓などによって意図的に失たように錯覚することができる。また、味覚もこれら3つが失われることで感じ方はかなりかわってしまう。しかし、触覚は例外を除けば生きていく上で切り離すことができない感覚の一つである。そのため、わたしたちは触覚を主な軸に考えることにした。

ご飯の入った器は温かいというイメージを持つが、器が冷たかったら自分が受ける感覚は異なってくる。また、砂に手を入れてみると自分から触れたにもかかわらず触られているような感覚になることもある。このように触覚には暖かい・冷たい、快・不快、また、「触る」だけでなく「触られる」といった性質がある。

さらに、触覚などは外部環境によって感じ方が左右される。例えば、好きな人と2人の時に触られても拒むことはないが、いきなり友達や知らない人から触られると拒否反応を示したりする。

これらの発表から、私たちは、今ある芸術の在り方を疑い、芸術の中で意識されにくい触覚に着目することで、触覚の重要性と、その触覚から生まれる能動的な美的体験の空間と、新たな芸術の在り方を提案する。

発表者氏名：今村涉

所属ゼミ：榎木ゼミ

タイトル：当たり前を疑え！

発表概要

突然ですが、「日本人は時間に正確」「イギリス人男性は紳士」「アメリカ人は陽気」など国によって特定のイメージを抱くことはありませんか？そのようなイメージの形成にはテレビニュース、映画、ドラマなど、マスメディアで提供される情報や映像が一因であると考えられています。[1]しかしながら、それらのイメージは正しいと言えるのでし

ようか。現在日本人は約1億2千万人、イギリス人は約6千500万人、アメリカ人は約3億人います。[2]そんな多数の人々を1つのイメージで捉えようとする事をあなたはどのように考えますか？

このように我々栩木ゼミでは、一見当たり前のように思われている事柄に対し疑問を投げかけています。「常識を疑え」が栩木ゼミのコンセプトであり、その姿勢で様々な角度からアメリカ研究を行っています。

今年度は特に「ステレオタイプ」というものに対し疑問を投げかけました。(※「ステレオタイプ」とは、ある特定の集団を表すと信じられている固定化されたイメージの事です。)前期では、「アメリカに住む黒人=先祖はアフリカから連れてこられた奴隷というのはほんと？」や、「アメリカ人の定義とは？」というお題についてグループワークを行いました。そこでは「ステレオタイプ」と現実の間に大きなギャップがある事を確認し、更には「一体ステレオタイプはどこで学習されているのか」という疑問についても研究を行いました。後期では、映画を題材に日本とアメリカそれぞれの価値観についてディベートを行いました。具体的には、両者の企業経営方針の違いや、日本人が考える「日本人」というステレオタイプについてです。このディベートを通し、私達は「ステレオタイプ」の良い面・悪い面について激論を交わし、「ステレオタイプ」についての理解を深めていきました。

今回、栩木ゼミのインスタレーションでは来場者の皆様に「ステレオタイプ」を通して「常識を疑え」というゼミのコンセプトを体感して頂く内容になっております。先にも述べたように、「ステレオタイプ」は今年度のゼミにおける様々なシーンで取り扱われた要素です。そして何より「ステレオタイプ」は、情報で溢れかえる現代社会を生きる『あなた』にとって決して切り離せない問題なのです。ぜひ、「常識を疑い」自分の殻(世界)を破

るきっかけを掴みに、栩木ゼミのインスタレーション作品へお越し下さい。

---

発表者氏名：山口満里奈

所属ゼミ：佐々木直美ゼミ

タイトル：世界遺産化による問題と改善～香川の四国遍路を例に～

発表概要：

私達佐々木直美ゼミは、日本地図をみると四国にだけ世界遺産がないというという点に目を向け、世界遺産による地域振興という観点から、今年度は四国お遍路について研究を進めてきました。その過程で、すでに四国で世界遺産登録に向けて推進委員会が動いていること、「お接待」という無形の日本特有の文化も持っていることがわかりました。そこで、四国お遍路世界遺産推進委員会の活動を知り、意見を伺う一方、地元の企業や住民の方々、お遍路をしている人たちからの意見も聞くために香川県にフィールドワークにいきました。フィールドワークを終え、自分たちが実際にお遍路を歩きながら体験し感じたメリットデメリットを改めて考察し、世界遺産へ向けての改善策を考えました。世界遺産登録されると観光客が増え経済が潤いますが、デメリットもあります。例えば、四国遍路と深く結びついている「お接待」という文化があります。観光客が増え、負担になることでお接待本来の価値が失われる可能性があると考えました。そこで、世界遺産登録後でもこの文化をなるべく守れるようにインスタレーション内で改善案を提案します。その他にも世界遺産登録後の懸念に対しいくつかの改善策を提案します。インスタレーションの最後には、私たちの発表を観てくださった方々に四国お遍路の世界遺産登録に賛成か反対かを聞きたいと思います。その結果と私達の改善案を学会後に、今回のフィールドワークに協力してくださった香川の方々にフィードバックし、四国お遍路の世界遺産登録の手助けあるいは香川

の地域振興に協力することを今回の発表の目的とします。

#### 参考文献

[1]渋谷明子他「メディア接触と異文化経験と外国・外国人イメージ -- ウェブ・モニター調査 (2010年2月)の報告(2)」『慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要』所収  
<http://www.mediacom.keio.ac.jp/publication/pdf2011/shibuya.pdf> (cap2018/11/05)

[2]GLOBAL NOTE 「世界の人口 国別ランキング・推移 (IMF)」  
<https://www.globalnote.jp/post-14946.html> (cap2018/11/05)

発表者氏名：佐竹航弥

所属ゼミ：衣笠ゼミ

タイトル：Re-Framing ～親から子への虐待を批判的な視点で考える～

発表概要：

<背景と動機>

私たちは、夏休みに大阪府にある人権博物館を訪れた。このフィールドワークを実施したきっかけは、ゼミ内で取り扱った「命」というテーマであった。

近年、医療技術の発展により、出生前診断という出産前の胎児の異常の有無を知ることができる機会を私たちは得られることができた。しかし、同時に私たちは命の選別をも可能にしてしまったのである。もしも、胎児に異常がみられた時に、果たして私たちはどのような選択をするのだろうか。

この背景より、命を生きる権利＝人権という考えから、人権博物館へ足を運ぶこととなった。

フィールドワーク先での展示から、特に私たちが衝撃を受けた「いじめ」をテーマとし、学会発表

に向けて議論を進めてきた。その中で、人間関係に焦点を当て、私たちと一番関係の深い親へ派生し、親と子の関係を軸とすることとなった。

はじめの、いじめについての議論を基に家庭内での問題の要因の一つにある、「虐待」を扱い、インスタレーションで表現をする。

私たち衣笠ゼミでは、全体として軸となっているテーマはないものの、「批判的な視点で物事を見る」という共通する認識を応用し、虐待を批判的な考えで見る。

虐待のニュースを見ると、「子どもがかわいそう、親は何をやっているんだ」というのが一般論である。当然、虐待はあってはならない行為であり、子どもに同情することも当然である。しかし、今回私たちは親の視点に立ち、なぜ自分の子どもに虐待をしてしまう事になってしまったのかを考え、表現しようという考えである。

<目的>

このインスタレーションでの発表を通じて、オーディエンスに物事を批判的に考える思考を養うきっかけ作りをする。

<発表内容>

家事や仕事、子育てを両立する親の日常をインスタレーションで表現をする。

ゾーンを4つに分け、それぞれ

1, ストレスフルゾーン

→子育てをする上での日常のストレスを表現する。

2, 孤独ゾーン

→家事や仕事、子育てに追われる親の心情を表現する。

3, 天使と悪魔ゾーン

→泣き止まない子どもを例に、近隣住民の反応を表現する。

## 4, ストレスフル but 希望ゾーン

→1 に付加価値として希望を表現し、スタンスや気持ちの変化を表現する。

とする。

## &lt;ゴール&gt;

・この4つのゾーンでの体験を通じて、体験者（オーディエンス）に、批判的に物事を考える擬似体験をしてもらう。

・新たな視点を持った上で、テーマに挙げた虐待問題をどう考え、どう行動していくか意見を持ってもらう。

---

発表者氏名：末久笑子

所属ゼミ：粟飯原ゼミ

タイトル：アフリカおじゃまします

発表概要：

ケニア人アーティスト、ワヌリ・カヒウは「アフロバブルガム」という呼称で、これまでにないアフリカ・アートのあり方を提唱してみせた。アートは社会に多大な影響を与える媒介のひとつであり、重要なコミュニケーション・ツールのひとつでもある。アフリカ大陸のアート作品の多くでは、政治的主張、歴史的含蓄、社会や共同体との関連性が重んじられる傾向にあり、またそれが期待されもする。カヒウによれば、このようなことは当然ながら重要であるにしても、一方で、ただ想像力のためのアート、アートのためのアート、「楽しく、力強く、突拍子もない」、「バブルガムみたいに飛んでいきそうな」、軽妙なアートが存在してもいいのではないか、とのことだ。

こうしたカヒウの見解にインスピレーションを受け、わたしたちは、おそらくほとんどの人が思いもよらないような「アフリカ」をひとつの部屋によって表現してみたいと考えた。アフリカ大陸とい

えば、貧困、戦争、HIV エイズ、独裁政治など、いまだに否定的なイメージで語られがちである。それは決して看過できない事実であるとしても、アフリカには、豊かで美しく、楽しくも感動的な、さまざまな側面がある。そうしたことを明らかにするために、わたしたちがアフリカを多角的に学ぶなかで出くわした、「おしゃれ」で「カッコいい」、「ポップ」なアフリカを、わたしたちなりに表現することを試みたい。まさに、カヒウをはじめ、近年活躍する若手アーティストたちが——作品に込められた意図はさまざまであるにせよ——そのとおきの「カッコよさ」をわたしたちに教えてくれた。

この「部屋」自体をわたしたちの解釈をとおして作り上げたひとつの「アート作品」とすることにくわえて、「部屋」の内部にも、アフリカ大陸各地から発信されたさまざまなアート作品を散りばめる。さらに、展示の中心を占める「アフロバブルガム」のモチーフのなかにも、多種多様なアート作品がモザイク状に組み込まれており、アフリカ・アートの入れ子構造となっていることがわかる。

アーティストたちの多様な思いが込められた作品の数々が詰まった「部屋」をとおして、アフリカとは、さまざまな人びと、さまざまな声、さまざまな色、さまざまなアイデア、希望、夢……によって形作られているということ表現し、まったく別様の「アフリカ・イメージ」をたちあげたい——そして、来場者を「カッコいいアフリカ！」への旅に誘いたい。